

Trial & Error

トライアル・アンド・エラー

No.60

試 行 錯 誤



特集 検証・アフリカ救援

シンポジウム 検証・アフリカ救援	2
報告 アジバールの1年	10
私たちにとってのアフリカ救援	15
マーシャ村の皆様、どうぞよろしく	18
スールのキャンプにおける パレスチナ赤三日月社	20
レストラン探訪 アンコール・ワット	23
「私、いまほとんど不満がありません」.....	24
Dear, My Friend	26
JVCNEWS	28

検証・アフリカ救援

伊藤正孝 犬飼一郎 勝俣 誠
岩崎駿介 福村州馬

(司会) 岡本 厚

昨年雨に恵まれアフリカの飢餓も鎮静したかに見える。JVCがエチオピアで開いていた病院もほとんど患者がいなくなり、今年の1月に閉鎖された。病院は閉じられたとはいえ、緊急医療用の薬品や食糧は現地に保管されたままだ。この雨によってもたらされた収穫が不確実なものであることは救援に携わった者は誰しもが感じている。

いったいアフリカの飢餓とは何だったのだろうか。私たちはいったい何をしたのか。そしてこれからどうしたらいいのか。これらのことを検証し、次の行動のてがかりとするため、“検証・アフリカ救援”のシンポジウムを持った。

飢餓はなぜおきたのか

岡本 — それではシンポジウムを始めたいと思います。最初に伊藤さんから80年以降のアフリカの飢餓のありさまと、現在どうなっているのかということを中心に説明していただいて少し頭の中を整理したいと思います。

農業の衰退と医療革命

伊藤 — 今回の干ばつの被害にあった国は27カ国。アフリカ全体の約半分にあたります。3500万人が飢餓に直面し、1983年から84年にかけて約100万人が亡くなったと推定されます。1年間でこれだけの人が亡くなったのはナチスによるユダヤ人虐殺のスピードと同じです。

アフリカの干ばつは前提として農業の衰退があげられます。80年に私はタンザニアにいましたが、そのころもう主食のとうもろこし粉が不足していて、それを買うための行列が一日中絶えることがありませんでした。このように農業が非常に弱っていたところに干ばつが来たのです。ですから農業の基本的な

てこ入れからしなければ問題は解決しません。

岡本 — それでは現地にいらした福村さん。農業の衰退について何かお感じになりましたか。

福村 — 僕は昨年はずっと現場に入っていました。5月、6月には1日の死者が10人ぐら出るなど物資の補給などに追まわれ、どこまで農業が衰退しているのかわかりませんでした。僕は飢えは基本的な貧しさが広範にあって、それに干ばつが引き金になって起きたものと思います。

病院のあったアジバールからさらに奥に入った村にどんな生活をしているか調査に行きましたが、そこで見たものはアジバールなどよりもさらにひどい貧しさでした。

岡本 — 岩崎さんも現地でお感じになったことをおっしゃっていただきたいんですが。

岩崎 — 私は今から20年ほど前にガーナに行き、2年間住んでいたのですが、そのころはアフリカと日本との間には貿易関係なども少なく、その相互関係についてはあまり考える機会がありませんでした。



岡本 厚(おかもと あつし) 1954年東京生まれ。77年早稲田大学文学部卒。同年岩波書店入社。以来『世界』編集部。



伊藤正孝(いとうまさたか) 1936年福岡生まれ。60年朝日新聞社入社。69年のピアフラ取材以来、アフリカ各地を取材。ダレスサラーム特派員、カイロ特派員を経て、現在『朝日ジャーナル』編集部。



犬飼一郎(いぬかい いちろう) 1932年東京生まれ。62年早稲田大学経済学科博士課程修了。専門はアフリカ経済論。67～74年までアフリカの各大学で教鞭をとり、現在は新潟の国際大学教授。



勝俣 誠(かつまた まこと) 1946年東京生まれ。69年早稲田大学政経学部卒。78年パリ大学博士課程修了。パリ第三大学専任講師、ダカール大学客員教員を経て現在は貿易研修センター助教。



岩崎駿介(いwasaki しゅんすけ) 1937年東京生まれ。63年東京芸大美術学部建築科卒。66～68年ガーナ大学で教鞭をとった後ハーバード大学大学院で都市デザインを学ぶ。82年より筑波大学助教。



福村州馬(ふくむら しゅうま) 1950年大阪生まれ。73年立命館大学産業社会学部卒。80年よりJVCの活動に加わる。84年、ICM(ニカラグア)で研修を受けた後、85～86年 エチオピアで調整員。

ここ何年かの難民報道などでアフリカがクローズアップされ、そのころからアフリカとの全体的なつながりが、より鮮明に見えてきたと思います。

私は昨年9月、エチオピアに行く機会がありました。実際に JVC の病院も見してきました。そしてそこで働く約 100 人のエチオピアの人々と集会を持ち、飢餓の原因について何があげられるか聞いてみました。彼らは 1. 雨が降らなかつたこと。2. 農業のやり方が十分ではなかつたのではないかということ。3. 植林をしなかつたこと。4. 年配の人たちがこのような状況を神のおぼしめしとして捉え、あきらめの気持が支配していたこと、などをあげていました。またエチオピアはエリトリアやオガデンなどの内戦に至る内部的な諸問題を抱えています。それは西欧列強との関係の中で歴史的に生み出されてきたものではないかと、彼らとの話し合いの中で感じました。

岡本 — それでは飢餓の大きな要因といわれます農業について、いかがですか犬飼さん。

犬飼 — 今回のような飢餓は 1950 年代にも 1960 年代にもおきていません。73-74 年に大飢饉が一度発生し、83-84 年にそれがさらに大規模になって発生したわけです。なぜなのか。西欧では農業革命から産業革命が起こり、近代化が進んで医療革命、さらに人口成長率の低下につながりました。ところがアフリカではそれが逆に起こったのです。農業革命、

産業革命の前に医療革命が起こりました。伝統的な多産型の家族構成のまま近代医療が農村地域に浸透しましたから幼児死亡率はいっきょに低下し、その結果爆発的な人口増加になってしまったのです。

50 年代や 60 年代の干ばつの時には飢饉は起こりませんでした。そのころは今のアフリカの農村で行われているような技術水準でも十分に暮らしていける生態的な土地と人間の環境のバランスがとれていたのです。しかし 50 年代に始まった人口増大がだいに肥沃な土地の人口を過密にし、農村の人々が従来の農業技術では生きていくことのできないような辺境の土地にまで出向いていかなければならなくなったのです。

アフリカの農業を考える場合、どうしても人口問題から考えていかないと問題は解決しないのではないかと思います。人口が増えると家畜は増えます。ところが一定単位の土地は決められた頭数の家畜しか飼育する力を持っていません。そたへ過剰放牧を行いますと、翌年の種まで根こそぎ食べつくされますから砂漠化が進みます。

このように人口問題を解決しない限り、アフリカの農業を再活性化しようとしてもそれはできない相談だと思います。

岡本 — 勝俣さん、これらの革命についてどう考えられますか。



勝俣 — 犬飼先生がおっしゃったように、現在のアフリカの問題を考える場合医療革命が優先したことについては、アフリカにいたどなたもが感じることだと思います。私はそれに教育革命をつけ加えてもいいと思います。

60年代前後に独立したアフリカ諸国はとにかく人作りが必要ということで、文盲教育、エリート養成教育を行いました。ところが圧倒的に農業人口が多い地域でその教育の意味を考えていきませんと、どうしても都会人口が増大して農業という手を汚す、生産的な仕事につく人が少なくなります。教育が普及するにつれ、ほしいものはすぐく広がっていくのにそれを支える農業は非常に脆弱なのです。新興国家は公共事業を増大させますから公務員をどんどん雇います。教育革命によって出てきた公務員ばかり増えて、その公務員の給与を支えるために農民たちは余剰を持っていかれるというしくみになっています。ですから教育の中身に農業に力を入れる、もっと生産的な人間がなぜできないかと考えます。

アグリビジネス原因説はまちがい

岡本 — 今、飢餓の原因ともいわれる農業の問題についてお話いただいたのですが、岩崎さん、現地をご覧になって、いかがですか。

岩崎 — JVCとしては事実検証というより、普通の市民として彼らがどうやって具体的に力を得ていくかが非常に大切だと思っています。私はアフリカ

は植民地時代、あるいは黒人奴隷の歴史を通じて彼らの中に心の植民地というものを作り出したのではないかと感じました。私はガーナでガーナ人とすれ違ったのですが、彼は私に対してへり下った挨拶をするのです。私は普通の挨拶をしているのに。今、アフリカ自身が強く自らが立たなければなりません。自らの国を自ら治めるという姿勢、あるいは自然環境なり農業を自らの力によって克服していく自信が、何よりもまず根底に存在しなければならないと思うのです。そういう意味で私たちには彼らと市民的連帯を分かちあう姿勢が必要なのではないかと思います。

岡本 — ただ今市民的連帯のお話がありましたが、これに入る前にもう少し飢餓の原因というものにこだわってみたいと思います。

世界全体から見れば食糧は余っている。それにもかかわらず飢えている人がいるというのは、アグリビジネス、巨大穀物企業があるからだという説があります。それが大きな力を持ち、かつての植民地体制の中で作られた単作経済をそれらの国々に強いている。そのために飢えが生じたという説なんです。

伊藤 — それは進歩派の学者たちがいつてる説ですが、これは不勉強だと思います。なぜなら換金作物自体の作付面積もじりじりと減っています。換金作物を作っても儲からないから農民が作らなくなったのです。アグリビジネスが暴れまわっているのは中南米であり、アジアです。アフリカにはあてはまりません。

アフリカの場合やはり1番大きな原因は医療革命ですね。人口が増えたため今まで使われていなかったあまり条件のよくない土地まで耕作する。あるいは放牧に行かざるを得なくなった。もう1つの原因はアフリカの政府がひどい農産物の買ったたきをやったことです。農産物価格は先進国によって低く抑えられていますが、アフリカの政府はその4分の1か5分の1の値段で農民から買い上げているのです。苦勞して作物を作るよりも都市に出た方がずっと稼げるのです。アフリカ諸国は都市にばかりお金を使いました。農村には独立以来の平均ではぼ予算の5%しか使っていません。それを上回る金額を医療や

教育に使ったのです。医療に力を注いだことは間違いではありませんでしたが、それと同時に農村開発や増産にも力を入れなければならなかった。それをしなかったのが農業の大きな衰退の原因だだと思います。

岡本 — アフリカの政府自身は飢餓の原因をどう捉えているのでしょうか。

伊藤 — 84年のOAU(アフリカ統一機構)の会議以来農業振興をいうようになりました。先進国の搾取が原因であるといい続け、自分自身が直すところを直さなければ、いつまでたっても飢餓はなくなりません。外からいくら援助しても飢餓は救えません。アフリカが正しい政策をとれば立ち直る力があります。土地はまだ余っているし、教育はどんどん普及しているのですから。私はそう思います。

会場からの声——①

■ 換金作物は農民にとって儲からないといわれましたが、それはなぜですか。

伊藤 — 政府に税金を取る機構が整っていないからです。それで政府は換金作物の輸出によって収入を得ようとしています。収入を多くするにはできるだけ農民からの買い上げ価格を抑えなければなりません。アフリカの国には換金作物の価格を動かす力はありませんから、低い国際価格よりもさらに低く農産物を買って上げて利ざやを取ります。

■ アフリカの政府は農業に力を入れなかったのが飢餓を招いたといわれます。でもそのようなエリート層にしたのは誰だったのでしょうか。やはり植民地の傷あとということを考えておかなければならないと思います。

■ 私は実際にモザンビークに行き、実際に政府の方ともお話ししてきましたが、伊藤さんのおっしゃったこととずいぶん違ったことを伺いました。

モザンビークの場合独立した時インテリはほとんど海外にいて、中間技術者もほとんどいなかったそうです。そんな状態から国造りを始めたのです。その出発点を見ないと構造の問題は見えてこないのではないのでしょうか。またこの国の場合ゲリラが道を爆破させ農産物が都市に来ないという問題もありま

す。農民にも工業製品が届かず、次の生産への意欲を妨げています。

アフリカは数世紀も前から奴隷貿易で苦しんできました。今援助したからといってすぐに助かるわけではないと思います。立ち直るにはこれから三世代ぐらいはかかるのではないのでしょうか。

伊藤 — 植民地時代の傷あとについて1つ考えなければならぬのは、アフリカは独立後、年月がたつにつれて飢えが始まるんですね。60年代、ほとんどの国が独立しましたが飢えはなかった。はっきり食糧不足になってきたのは70年代に入ってからです。植民地時代の傷あとが残っているという方にお聞きしたいのは、それではなぜ60年代に飢えがなかったのかということですか。

勝俣 — 1ついえることは雨が降ったことです。60年代の初頭は少なくとも私のいた西アフリカでは雨が降りまして、作付面積が増えました。やはりそのころは天候条件がよかったのではないかと思います。

伊藤 — 天候のことはよく知りませんが、そのころの暮らしが今よりもよかったというのは事実です。今飢えている国は降雨量にかかわりなく一人当たりの食糧生産指数が落ちています。これは国連統計ではっきりしています。ですから飢餓の原因には別の要因を考えなくてはなりません。たしかに農産物の買いたたきなど先進国の責任がないとはいえません。しかしそれが主たる原因ではないのです。アジアや中南米では一人当たりの食糧生産指数は伸びています。それでも飢えるのは明らかに配分の問題です。しかしアフリカの場合は純粋に生産力の問題です。この両者を混同してはいけません。農業政策の失敗、それがアフリカの飢えの原因です。

次にモザンビークの問題です。MNRという南アフリカから支援を受けたゲリラがモザンビークをかく乱しているのは事実です。しかし注意しなければならないのは、ゲリラの影響を受けないインド洋沿岸部にまで飢えが広がっていることです。農民に工業製品が届かないというのも工場を国営化した政府が経営に失敗し、生産する力がなかったからです。

■ 先ほど50年代、60年代に飢餓はなかったと、犬飼先生がおっしゃいましたが、ニジェールの歴史を調

べてみますと、200年ぐらい前から10年に1度ぐら
いは大きな飢饉がおきているのですね。政府もその
ようなことはあまり公表したくないでしょうが、60
年代以前にそういう飢えはなかったのか、もう一度
じっくり調べてみる必要があると思います。そうす
れば今後の飢餓の参考になるのではないですか。

■ 医療革命が人口爆発をもたらし、それが飢餓の原
因になったといわれましたが、私の実感は少し違
うように思います。私はチュニジアにJOCVから医
者として派遣されていましたが、それほど大きな変
化が人口問題の上におきたのかは疑問です。乳児死
亡率は大半の国ではまだ10%を越えています。多
産少死になったというのはアフリカの医療革命を
かいかぶりすぎてはいませんか。少なくとも近代
的な医療は農村部にまでは及んでいないのでは
ないかというのが私の実感です。

犬飼 — 3点ほど申し上げたいと思います。まず
医療革命という言葉が適切でなければ人口革命とい
ってもいいと思います。アフリカの人口成長率が
加速的に増大してきているのは否定できない事
実です。アジアや中南米では60年代以降人口成
長率は低下してきましたが、アフリカの場合
はどの政府も人口政策に手をつけていません
のでこれからも3%の人口増加率が続くのでは
ないかと思っています。

先程伊藤さんが価格政策について説明されまし
たが、農業の場合価格と同時に開発の技術の問
題も考えなければなりません。アフリカの政府
も農村開発を全然やらなかったというのでは
ありませんでした。ただ近代化に感
わされた結果、従来持っていた農
民の生産技術を無視してしまっ
たのです。アフリカでは一般に
混作といって、一つの畑にいろ
んな種類の作物を植えます。と
ころが外国の専門家はだから
生産性が上がらないのだと単
作を勧めたのです。しかし混
作では少々気候の変化があっ
てもいくらかは収穫がありま
すが、単作ではゼロになるこ
ともあるのです。また単作す
るためには水管理をしなくて
はならないのですが、それを
せずに単作をしろとい
ってもできるはずはありません。
われわれがこれからなんらか
の形でアフリカの農業をお手
伝いできるとすれば、まずア
フリカの農業を勉強すること
です。



私たち日本人は乾燥地農業を知りません。アフリ
カの農民から農業を教えてもらう、そのような姿
勢で入らなければ失敗するのではないかと思
います。

それから歴史を調べていきますと、局地的に
深刻な飢えがおこったことはありますが、アフリ
カ全体に飢えが広がったのはここ70年代、80
年代に入ってからようです。

勝俣 — 少し言葉を整理したいと思います。まず
飢えの意味ですが、1つは栄養学的、生理学的に
食べられない状態、そしてもう1つは食べられ
ない故に人間の尊厳が失われていることです。
もう1つは植民地主義の浄化ですが、伊藤さん
がおっしゃったように白人のせいにするのはも
うやめて、自分たちが努力しようという声も
出てきているんですね。そして植民地という
のは単にものを収穫したのではなく、岩崎さん
がおっしゃいましたが、植民地としての支配
を受けた人の心は非常に従属的になるという
ことです。やはりモデルは白人の世界にありま
して、ものだけからは植民地としての傷あ
とは見えてきません。

次に価格政策ですが、これを重視し、農民に
支払う金額を上げれば農業が発展し、その
国の貧困がなくなるというのはいい
すぎではないかと思っています。
農民が支えている公務員、つまり
都会人優先の教育政策を改善しな
ければ買い上げ価格の問題を抑
えても農業の改善は無理だと思
います。

最後に生産と分配の問題ですが、私は
両者を分けて考えることはでき
ないと思います。たしかにア
フリカの生産力は低い。生産力
を上げるにはある程度働きがい
のある平等な社会を提示しな
ければだめだと思
います。

■ 飢餓の原因は特定できません。今われわれが考えなければならないことは原因を特定することでは

なく、この現状で何をなするかということではないでしょうか。

アフリカと日本…… 私たちにできること

岡本 — それでは今度は自分たちの問題としてどうかかわるかというところに入っていきたいと思えます。さきほど市民的連帯という言葉が出ましたが、私たち自身がどうかかわるかということについてお話しただければと思います。

岩崎 — 基本的にわれわれがここで今生きているということは、世界のあらゆる人と裏と表の関係でつながっているということを感じています。私たちの食糧の多くも海外に依存しています。ですからわれわれが彼らにかかわるということは、彼らのためというよりわれわれ自身のためです。現代の社会システムは心と体を分離させる方向にあります。ものは世界中に拡散しているのにかわらず心はそれに従って広がらない。そのような状況の中でわれわれがアフリカの問題にかかわるのは心と体を一致させる行為であるわけです。すなわちわれわれ自身のために彼らにかかわるのです。

JVCの活動は結果的に南アフリカの問題を隠してしまったのではないかと批判があります。われわれはその指摘にちゃんと答えていかなければならないと思えますが、実際はそれらの論理的批判に論理的に答えていくというより、活動の現場でおきる、より具体的な問題にどのように答えていくのか、乗り越えていくのかによってそれらの批判に対する回答を出していく方がより賢明だと思います。現場でおきたそれぞれの問題をどのようにして解決するのか、そのことで援助するというを検証していくしかないと思えます。そのような問題に対し、試行錯誤しながら可能性を追求していきたいと思っています。

福村 — エチオピアは世界戦略的に非常に微妙なところに位置しています。また今回のエチオピア救援は政府主導型というか官民合同で行われるなど、かなり政治色の濃いものでした。人道的な援助とはいえ政治的なものを抜きにして考えることはできません。

しかし命が奪われていく人に手をさしのべなければならぬ時は、すべてのことに目をつぶってもいいのではないかと思います。救援する側がある程度物的な豊かさを持ちこんでもしかたないかなと思えます。

勝俣 — 最近たまたまフィリピンのネグロス島を援助したいというNGOの方々とお話しする機会があったのですが、ここでネグロスとサヘルを比較して農業の停滞の原因はどこにあるのか、世界経済とどういう関係にあるのかを見てみたいと思えます。

自然条件はサヘルが乾燥地であるのに対し、ネグロスは雨が豊かで恵まれています。換金作物はサヘルが落花生で、ネグロスはサトウキビです。土地の所有形態としてはサヘルは自営農民ですが、ネグロスは地主と小作人です。次に余剰は、サヘルの場合は政府が買い上げますが、ネグロスは小作人ですから賃金をもらいます。ネグロスは気候がいいから作物を食糧に転換すれば2毛作もできるかもしれませんが、それができないのは小作人だからです。ですからどうしても農地改革が必要です。でもサヘルでは



混作しているJVCの実験農場(ソマリア)

サヘルとネグロスの比較

	サヘル	ネグロス
自然	乾燥地	湿潤
作物	落花生、棉	サトウキビ
土地所有態	自営	小作人
余剰	買い上げ	賃金
飢えの原因	低生産性	世界不況

農地改革は必要ない。公共部門優先の国作りをどう変えていくかが先決だと思います。また今 NGOの方がネグロス島に食糧を送ろうとしています。サトウキビの値が上がったら食糧を自給するよりサトウキビ畑で働いてその賃金で食糧を買った方がいいと転換してしまうかもしれない。その農民のしたたかさやどう取り組むか、これも NGOの問題だと思います。

犬飼 — JVCも6年経ってその経験の中から NGOとして何をするのか、そのためには何をしてあげいいのかということが少しづつわかってきたのではないかと思います。私としては自由にとび回れるお医者さんや看護婦さんなどのリストを持っていて何かの時には1週間以内にアクションをとれるような組織を作っておくこと、これが大切だと思います。

しかし開発援助となると NGOの役割は非常に難しいと思います。それを確実にやっていくためには専門家の集団とか、5年は腰をすえてやっていける人に加わってほしい。でも今のところは緊急援助の中で実績をつみ重ねていくことが必要なんじゃないかなと思います。私も JVCの活動を知るにつけて、仲間に入れていただきたいなと思いますが。私のできることは限られていますからできるだけ日本の人にこの活動を知ってもらおう。そういう努力を通じて何らかの形でお手伝いしていきたいです。

伊藤 — 日本政府はアフリカをずいぶん救援したかのように思われていますが、数字の上からは決してそれはいえません。実のところ飢餓のひどかった84年は前の年より援助額が減っているのです。日本の

援助には円借款が含まれていますが、返せない所には貸さないということで、84年には円借の額をずいぶん縮小しました。ですから特別援助を上乗せしても前年に追いつかず、その穴を埋めたのが民間の募金だったわけです。今後も NGOは政府の不足をカバーするだけでなく、援助の主体となっていくものと思います。

しかしアフリカに関していえば、日本人はアフリカを救うことはできません。農民にやる気を起こさせる力は、アフリカの政府にしかありません。私たちは緊急救援はできてもその国の生産機構の中に入って生産を活発にさせることはできません。私は JVCのソマリアのプロジェクトは失敗するんじゃないかと思っています。それは JVCの技術や資金力はその土地に根づいたものじゃありませんから。その国の主体性をかけて育てるのが生産力です。これに外国人が果たせる役割はほとんどないと思います。5億人近い農民がいるアフリカ大陸に、1万人や2万人の外国人ボランティアが入ったところで、パイロット農場を作るぐらいがせきのやまです。パイロット農場に持ち込まれる揚水ポンプ1台にしろ、アフリカの農民にとっては手の届かないぜいたく品であり、全大陸への普及は期待できません。だから JVCに限らず外国人ボランティアによる農業振興は期待できませんが、そのかわり医療や教育に関してはある程度支援、連帯できると思います。

会場からの声——②

■ 日本のアフリカに対する援助についてお話したいのですが、これは食糧増産のための援助ではありません。都市の建造物などのために円借款が使われているので、そのような政府の援助を増やしても事態の解決にはあまり役立たないだろうと思います。

それから今伊藤さんが NGOの限界について話されましたが、私も日本の NGOについてはまったくそうだろうと思います。しかし日本以外では NGOが緊急援助を経て開発援助に非常に大きな役割を果たしています。

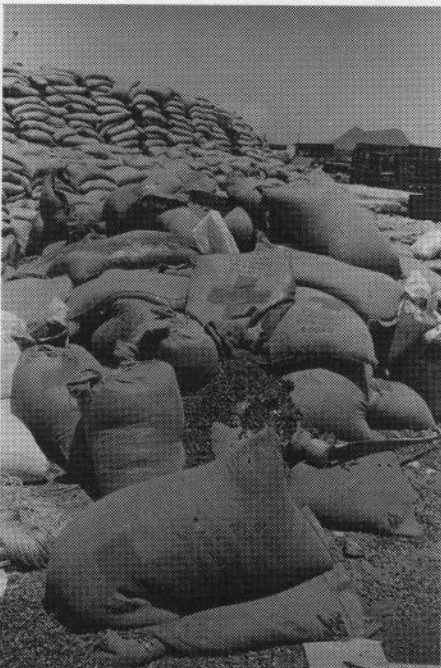
■ 日本の政府の援助額について説明されましたが、その援助金の使われ方が検討されなければ数字はほ

とんど意味がないのではないのでしょうか。そしてそれを補助したという民間のお金の使われ方についても詳しく知りたいと思います。

それからNGOの質の問題ですが、悲感していてもしかたがないので希望を持ちたいと思います。そこで質問なんです、私の子供にアフリカに見学に行かせた方がいいのか、それともそんなお金があったら援助金として送った方がいいのでしょうか。

■われわれは欧米信仰というか、向こうのNGOがどえらいことをしているというのが頭から離れないのです。たしかに日本のNGOは歴史が浅いから向こうから学ぶことも多いのですが、これからは独自のものを模索していく努力が大切なのではないでしょうか。

■救援ということを自分自身としてどのように考えるかという話をもう少し進めた方がよいかと思います。食糧をもらいすぎた山間部に肥満体になった子供たちがいます。緊急から長期にわたる援助をきちんととらえ、自分自身が救援するとはどういうことなのか考えていきたいです。また日本の救援関係者がそれ自体をもうけの材料にしているような



放置されたままの援助物資©野中章弘

今援助のあり方が問われている



気もするので、そのあたりも実体を伝えてほしいと思います。

■朝日新聞のレポートにもありましたが、JVCももっと何らかの形で日本政府などとも複合的に協力した方がいいのではないかと思います。JOCVの任期を終えた人にも加わっていただいて、コンプレックス方式というのをこれからも推し進めていただきたい。

NGOの可能性を信じたい

岡本 — 非常に有意義な議論が続きましたが、今後ともJVCがこういった機会をさまざまな形でもっていただきたいと思います。

岩崎 — NGOに対する議論の中で承服できないところもありました。私はもっとNGOの可能性を見ようと思います。われわれは政府の代替機関ではありません。金額とか技術の問題ではなくて、われわれの彼らに対する市民連帯そのものに正当性があるかもしれない。それ故に少ない金額でも大きなことを成しえる可能性があるといえます。それは新しい形の運動として生じていることを感じています。

最後にさきほど自分の子供さんをアフリカに行かせた方がいいのか、それともお金を送った方がいいのかという質問がありました。私は子供さんをアフリカに行かせた方がいいと思います。なぜならそれは知覚と認識を広げることになるからです。私たちは特に専門性を問いません。ひとりひとりにできることがあります。それらの努力は必ず意味ある結果をもたらすと思います。NGOにはたいしたことができないといわれては納得できません。そういう可能性を信じてこのシンポジウムを終えたいと思います。

〔報告〕

アジバールの1年

福村州馬

(元エチオピア現地調整員)

はじめに

1984年後半から盛り上がった干ばつ・飢餓救援ブームの中で、私たちJVC(日本国際ボランティアセンター)は自分たちのでき得る範囲で現地での救援活動の可能性はないかと検討を始めた。幸い資金のメドもつき現地調査の結果、エチオピアの北部ウォロ州のワレヒメノ郡アジバルという地で医療活動をする事に決定した。

私は1980年から4年間、タイ・バンコク市内でのスラム改善プロジェクトで活動したのち1984年、中米ニカラグアで6カ月間、ある国際機関の研修員として欧米と中南米諸国間の技術移転に関する業務に携わってから、1985年2月、調整員として今回の救援活動のためエチオピアに飛んだ。そして今年2月までちょうど1年間現地に滞在していた。

今回の私たちの活動は何万人、何十万人という日本国内の人々の善意で可能となったが、その意味でも現場で働いた者としてアジバルという一限定地域ではあるが、現地での活動の経緯について報告したいと思う。

ウォロ州ワレヒメノ郡アジバル

ウォロ州は内戦の続くチグレ州、エリトリア州と並び、エチオピア国内では干ばつ・飢餓被害の最も大きいといわれた地域である。ウォロ州は11の郡に分かれ、そのひとつがアジバルのあるワレヒメノ郡である。人口30万人余り、面積2700平方キロのワレヒメノ郡はさらに3つの副郡(テンタ副郡・マグデラ副郡・ラガンボ副郡)に区分されている。アジバルはそのひとつのテンタ副郡の中心地である。リフトバレーと言われる大地溝帯のただ中、標高2900メートルのテーブル台地の上にこの800世帯ほどの町は存在している。

郡全体では保健所のほかにアジバルも含めた8町村に診療所があるが医師はいない。看護師と看護婦が各1名保健所にいるだけで、診療所は2年間の医療訓練を受けた看護助手たちによって運営されて

いる。低地と高地の標高差が1000メートル以上あるこの峡谷地帯では、診療所の存在は村人にとって身近なものではない。有料でもあり、通常時ならともかくとして、飢えにさいなまれている人たちにとってはましてそうである。

首都アジスアベバから国道1号線を400キロメートル北上するとウォロ州の州都デンがある。そのデンの手前数キロメートルの所を脇道に入る。四輪駆動車のためにあるような悪路の山道を120キロメートル走るとこのアジバルがある。途中、緑らしきものはいくつかの村や町の周辺を除くと全く見られない。地肌を見せる山の斜面をはじめ茶色一色の世界で、実りのかけらもない。しかし、地形の美しさや景観の大きさには感動する。

医療活動開始

ワレヒメノ郡の保健医療面の責任者である看護士氏と話し合い、アジバルの診療所横の空地で活動を開始する事に決定した。

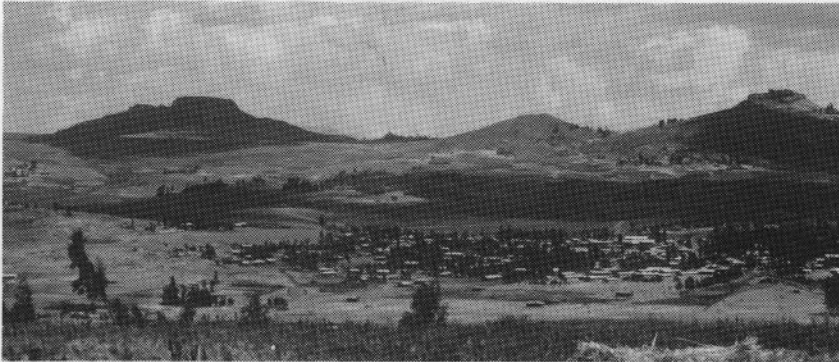
2月16日、アジスアベバで入手したテントを4基設置。同時に病棟、調理場、トイレの建設を開始した。現地ワーカーの教育も始めた。診療助手として雇ったワーカー数人には体温や体重の測定方法、薬の飲ませ方、外来患者の登録のし方などを、調理場のワーカーには粥やミルクやパンの作り方を教えた。こういう事に全く経験のない地元の人たちに手取り足取り教えるのが2人の日本人看護婦である。ひとりにはマラウィ、タイ、マレーシアで、もうひとりにはマラウィとイギリスで看護婦として働いた経験をもつ。日本では珍しく海外での実務経験もあり英語にも堪能な看護婦さんたちである。医師はエチオピアに来る寸前までタイ、カンブチア国境で活動していた若い外科医。

2月20日。外来診療開始。

2月22日。入院患者受入れ開始。

最初の3、4週間というもの外来患者数は1日平均50人余りだった。しかし入院はどんどん増えアッ

アシバール村



人。私たちの病院に来る人の数も激増し、それに伴って施設も拡張の一途を辿った。3月下旬には鉄条網で囲んだ70m×50mほどの敷地に病棟3棟、外来待合所、調理場、食器洗い場、毛布洗い場、毛布用の蒸気洗浄室と干し場、ゴミ焼き場、死体安置室、そして9

という間にテントは患者で溢れた。2週間目、40人。3週間目、60人。4週目、90人。トタン作りの60平方メートルほどの病棟も患者とその付き添いの人たちでごった返す。栄養失調児が多く、下痢や肺炎を伴っている。

アジバールでは私たちとほとんど時を同じくして、アメリカの援助団体ワールドビジョン(W.V)が食料配布と栄養失調者への給食活動を開始した。援助団体間で受益者を取り合うといったあり得べからざる争いが別の地域であったと聞いたので、私たちはそういう混乱を防ぐためにも話し合いを持った。飢え、栄養失調で弱っている人たち、つまり給食(フィーディング)のみ必要な人たちはW.Vへ、栄養失調であっても他の疾病にかかっている人たち、医療援助の必要な人たちはJVC、というふうに分担を確認した。これ以降、W.Vの給食センターとJVCの病院の間の砂利道約500メートルを、病気から回復しても引き続き給食の必要な患者や罹患の発見された栄養失調児などを運ぶ車が往來する。また不足した物資や薬品を貸したり借りたり(借りる事の方が多かったが)するなどの協力関係がその後もずっと続いた。

W.Vが本格的な食料配布と給食活動を開始してから、周辺の村々だけでなく奥深くからもアジバールに向けて人が集まり出した。食料配給を受けるために来た人、栄養失調の子供がW.Vの給食の対象として収容され、自分たちも付き添いとして何がしかの食物を得られるのを期待する人、とにかく何かを期待して村を捨ててきた人、あるいは再定住行きのトラックを待つ人などである。その数1万5000~2万

基のテントが並んだ。

雨

アジバールを恒久的な避難所にしないという方針から政府はテントすら提供せず、W.Vで給食を受けている人たちと、私たちの病院に入院している人たちだけが雨露を凌げる状態であった。大多数の人が人家の軒先や道端、あるいはさえぎる物の全くない野原での野宿である。

4月。雨が降り出した。5月半ば頃まで、決して量は多くないが時にはお湿り程度、時には大粒の雨やひょうが断続的に降った。赤道の少し北、北緯12度。日中は23℃ぐらいまであがるとはいえ標高3000m近い高地の事、夜の気温は4~5℃まで落ち、それに加えて強い風が吹き抜ける。野風に吹き晒された栄養不足で抵抗力を失った人たちが肺炎でやられる。やせ衰えた子供の胸から聴診器を通してガラガラという肺の音が聴こえる。そして汚染された水を飲んだ事が原因と思われる下痢と激しい嘔吐に苦しむ人たち。バケツにドドドッと吐き出される大量の水分。点滴が脱水に追いつかず多くの人が息を引き取った。

さらに増設した病棟と文字通り林立する20数基のテントの殆んどを下痢患者が占める。

死

JVCの病院(フィールド・ホスピタル、野戦病院とでも言うのだろうか)には一番多い時で100人近くのエチオピア人ワーカーがいたがその内15人をデーリーワーカー、つまり日雇い労働者と呼んでいた。

毒性を知りつつもアルマを食べるしかない



彼らの主な仕事は墓を掘る事と埋葬である。

父親を失い病院内をはりさけんばかりの声をあげて走り回る14~15歳の少年。子供の死で気がふれてしまい、毎日病院に来て泣いたり笑い転げたりする若い母親。栄養失調からだろうか青白色になった眼が片方飛び出した幼児、そして下痢と嘔吐で消耗しきった妻を抱きかかえつつ、その幼児を憐憫と無力感の入り混じったような表情で見つめる父親。死体安置室の入口にたたずみ、あるいは鉄条網の囲いに擁まりながら嗚咽、慟哭する人たち。

この頃毎朝病院に行くとき、まず死体安置室でその前夜から朝にかけて亡くなった人の数を数えるのを私は日課としていた。数だけなら記録を見れば判るのに何故それを日課にしていたのか自分でもよくわからない。ひとは自分の生まれてくる場所を選べない、という言葉を実感する。

4月74, 5月119, 6月68, 7月61, 8月67, 9月46。私たちの病院で死亡したエチオピアの農民、その家族、子供たちの数である。

物資調達

私たちはアジバールからさらに12キロ奥へ入ったテナタという町のホテル「最初、馬小屋かと思った」とある看護婦はあとで述懐していたほどのものが一を宿舎としていた。この町は郡都であり、発電機のおかげで毎晩3時間ほど一応電気がつく事になっているが、ディーゼル油切れや故障でしょっちゅう停電になる。そこで私たちは専ら灯油ランプとろうそくに頼っていた。一応その施設にある電話と電報も似たようなもので、1度はアジバールから打った電報が1カ月後に届いた。シャワーを浴びる事

や野菜の購入にも悪路を120キロ走らねばならない。当然物資調達が困難であった。交通の便が悪い上に首都アジバールの駐在事務所との交信もままならず、ピックアップトラックも事故で使用不可能になった。アジバールにおいても物資、特に医薬品の購入は絶対的な品不足であり、煩雑な購入手続きも物資の調達を困難にした。そのようなことから直接患者に接し薬の到着を待ちわびる医療メンバーと、物資調達に回る私との間で感情的対立の起きた時期もあった。

“アルマ”

病院で毎日の仕事に忙殺されながらも、周辺地域の村落の実態を見たいという気持ちは、私たち全員が前から持っていた。そこで何とかやりくりして7月下旬、初めての調査に出かけた。

アジバールから90キロ。車で4時間。村に到着した時は全員かなり疲労していたがそこからすぐ数百メートル下の低地に下りていった。一番干ばつ・飢えの被害がひどいと聞いてきた所である。集落を3つほど訪れただけだったが、どの家でも薄暗い部屋に病人が横たわっており、その多さに驚いてしまった。何を食べているのかという私たちの質問に農民は一律に“アルマだ”と答える。このアルマと呼ばれる雑草はそのカビが毒を含むらしく、長期間食べ続けると足や腹部が膨れたり、足の先が腐り、死に至ることもあるという。もちろん村人はその事を知っていたが、選択の余地はなくアルマを食べていた。

予想に違わず村の状況はかなり悪かった。しかし私たちはこの恐ろしい悪路の続く90キロを乗り越えて医療活動を伸ばす余地はなかった。ここにはまず食料の援助が必要であるが、いずれにせよ私たちにこれらの要求に応える力はなかった。

再び雨

7月から9月にかけてこの地域全体で4年ぶりという本格的雨季が訪れた。4月と5月の雨が若干の実りをもたらした事もあるが、ワーカーたちの表情も明るくなった。とにかく、雨が降り出してからというもの、みるみるうちに畑や山の色が変わっていく。

緑色がどんどん増えていき、自然の甦えるのが確実にわかる。

病院の方も峠を越したという感じでだいぶ落ちついてきた。

再定住

9月と10月に行った3回の周辺地域調査でも、7月に比べて明らかに状況は良くなってきた。豆やソルガムという、もろこし科の作物も実り始めているのが見られた。しかし一方、村落を歩き回ると廃屋の多いのが目につく。流民としてどこかへ行ってしまった人たちもいるが、そのほとんどが政府の勧める再定住のために村を出て行った人たちの抜け殻である。

政府によれば、家長に扶養家族を同行して定住先で農業に従事したいという希望があれば、その一家を再定住させるという。別の話では、耕す土地がない、家長(男)が死亡している、牛や鋤・鍬など耕作手段を持っていない、という人たちが再定住に選ばれるという。この選出は末端の農民組合委員会、副郡レベルの行政当局、政府の一機関である救援復興委員会の三者で行うとされているが、実質的には農民組合委員会が主導権を握っているようだ。

この再定住計画は北部3州からの大規模な人口移動である。反政府ゲリラを孤立させるといって純政治的なものであるという批判や、その移動のさせ方が非人道的であるとして欧米西側諸国の政府や一部民間救援団体から強い非難があった。11月にはあまり明からさまに批判したために、フランスの民間救援団体“国境なき医師団”がエチオピアから閉め出される事件があった。

私が滞在した1年間の間にアジバールでは再定住の大きい動きが2度あ

った。1度目の2月から5月にかけての移動は村で食いつめた農民たちの全くの自由意志によるものだったと思う。しかし11月頃の移動は明らかに強制的であった。移住希望者はこの頃ゼロに近かったに違いない。7月から3カ月間降った雨のおかげで収穫が目前に迫っていたし、自分の土地で生きていける希望を持ち始めた農民が未知の土地へ動きたくないのは当然であろう。

しかし、と郡の党第一書記氏は言う。この郡では土壌が既に疲弊しており、雨が降るたびにさらに表土が流されてしまう(これは本当だと思う。雨が降ると斜面の多い地形を鉄砲水が暴れまわる)。肥沃な土地があるのにそこへ行かず飢えて死ぬのを待っている者を救うには強制手段もやむを得ない。移住の対象となっているのは貧農ばかりだ。移る方がいいのだという事を農民に納得させるのが自分の仕事だ、と氏は力説する。末端レベルでの人選の仕方とその過程で見た幾つかの事象や移住先の状況など強く疑問が残るが、私には代案が浮かばず反論する材料も乏しい。

ちなみに1984年12月から翌6月末までの期間にワレヒメノ郡から再定住地に向かったのは約2万2000人。最近の数字は判らないが、34万人という1年余り前の郡人口はもう30万人を切っているのではないだろうか。



主な疾病は栄養失調、下痢、肺炎… ©野中章弘

病院閉鎖

10月末頃から患者数が目に見えて減り出し、12月の2週間目には初めて1週間の死亡者数がゼロになった。病院に来る人たちの着衣の色がみんな白っぽく、以前のように汚れに汚れて茶色になったボロボロをまとっている人は殆んどいない。診療を待つ間地面に横たわる人もいない。周辺農村での調査から見ても一般的に状況が好転しているのは明らかである。アジバールでは毎週土曜日に市が開かれるが、そこで調べた物価の動きも参考になった。(下の表)

緊急事態は一応終わったと私たちは判断し、病院閉鎖を決定した。外来診療中止、病棟閉鎖、ワーカーの解雇などを経て1月中旬、病院の門を完全に閉じた。

このJVCアジバール病院の11カ月間に、外来患者総数4万7661、入院患者総数5504、在院患者数1日平均135、死亡者総数509。主な疾病は栄養失調、下痢性疾患(約半数が赤痢)、肺炎、熱性疾患(回帰熱、マラリア、発疹チフス)、皮膚病、はしかであった。

活動した日本人スタッフ15名(医師、看護婦、非医療スタッフ各5名)。

医療品以外の主な物質は小麦25トン、粉ミルク20トン、食用油4000リットル、砂糖5.5トン、粉石ケン600kg、固型石ケン3000個、毛布6000枚、ディーゼル油2万リットルを消費した。

昨年11月上旬エチオピア人ワーカー81名に、「あな

1985年

	2~3月	4~6月	7~8月	9~10月	11~12月
テフ (主食の穀物)	4.50	5.50	3.50	3.00	1.90
小麦	3.50	3.75	2.70	1.75	1.00
ソルガム	3.20	3.75	2.50	1.00	0.65
大麦	3.00	3.25	1.50	1.20	0.70
羊(一頭)	20	18	60	75	65
牛(一頭)	60	45	120	200	210

- 単位、ブル(1 Bill = 100円)
- テフ、小麦、ソルガム、大麦は約1.3kg(1缶分)の値段供給が少ない4~6月は高く、収穫のあった11~12月は安い。
- 羊、牛は大きさなどにより同じ一頭でも値は異なる。2~6月の安値は生活が最も苦しい時で、農民が羊や牛を投げ売りしたためだろうか。降雨で牧草が出始め、耕作のできるようになった7~8月頃は値が急騰した。

たの家族や親類にこの1年間で死亡した人がいますか？」という質問をしたところ、餓死89、病死142、その他8、計239例の死亡が報告された。

おわりに

JVCはインドシナ難民の大量流出をきっかけに1980年、タイで生まれた日本人による民間援助団体で、私たちはそれを“市民団体”と位置づけている。今回の活動は日本に住む一般市民の寄付で成立したが、現地ではそれらの寄付で購入した物資のみならず、イギリスの“Band Aid”やアメリカの“USA for Africa”からの援助物資やアルゼンチン、カナダ政府の寄贈した小麦粉や食用油なども使い、その意味では文字通り国際的支援に支えられたと言える。

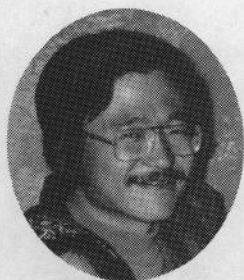
今、日本では救援ブームは既に去ったように見える。今回の盛り上がりはジャーナリズムに煽られたいつもの“ブーム”だったのだろうか。経済発展のおかげで多くの日本人が海外へ気楽に出られるようになった。同様にJVCの活動も日本の経済繁栄を後ろ盾にしていると言えよう。しかし北の飽食する“先進国人”の免罪符ではありたくないと思う。また“お涙頂戴”で成り立つ援助から脱出したいとも思う。飢えにさいなまれる姿を見て涙する人が南アのアパルトヘイトに無関心だというこのギャップを克服できないだろうか。

エチオピア政府も緊急事態が一応終わったと言う。しかしまさに“一応”である。今度の雨季に雨が降るという保証はない。また今回の雨でもみんながみんな収穫を得たわけでもない。雨が来るまでにすでに種籾をほとんどあるいは全部食べつくしてしまった農民たちがいる。収穫のない彼らが今度の雨季まで生きのびるには誰かが食料を供給せねばならない。アジバールをはじめワレヒメノ郡は私たちの去ったあと再び“無医郡”になってしまった。

病院で働いていたワーカーたちは各々の村に帰って行った。しかし彼らの前に明るい未来は決して開けていない。JVCは同地域で植林、農業などからなる復興協力活動を始めたが、私は彼らや退院していた人たちがこれからどうなっていくのか見守り続けたいと思う。

● 私たちにとってのアフリカ救援 ●

植林をやろう



林 達雄

グランドキャニオンのような峡谷にはさまれたテーブル台地、一面の褐色。岩肌の露呈した丘陵の頂上付近まで段々畑が首飾り状に連なる。農作物や雑草の緑がはぎとられた干ばつの最中では木がないことが一目瞭然である。

3カ月後、休暇で山を下り国道沿いの町で草花を目にした時には感情が爆発しそうになった。日々の作業の中で置き去りにしていた緑に対する飢えに気づいたのである。

病院建設の際は支柱用の木材は州都デシから運んだ。州都の材木屋には直径10cm以上の木材は見当たらない。伐採したばかりの若木が並んでいる。病院の調理にもこの若木を薪にして使う。

ある日のこと、病院運営に必要な物資の調達を行っているエチオピア人コーディネーター、イットベルグ氏が「薪は市場でバラ買いするよりもユーカリの林を一山買い、私たちの手で伐採する方が安上がりだ」という。その時の衝撃は今も忘れない。干ばつ被災者のために何かできないかと思って入ってきた私たちが、干ばつを引き起こした一因と考えられる森林伐採に直接手を下そうというのである。わずかに残された木々の伐採に間接的な形ではあれ加担することを心苦しく思っていた矢先でもあった。病院の経費節減につながるイットベルグ氏の指摘は当然の成りゆきであろう。だが自ら手を汚す段になって、今まで仕方がないで済ませてきたことの意味が明瞭となった。そして私たちが今後なすべきことがおぼろ気ながら見えてきた。それは干ばつによってすでにひきおこされた結果（飢餓、病気）に対処することではなく、干ばつの被害を未然に防ぐことである。村人がその生活の中で、食糧・水・住居を恒常的に確保できるようにしてゆくことでもある。

まずは木を植えよう。木のない土地に木を植える

ことが悪いわけではない。

植林を成功させるためにはどうしたらいいか。植林は単に薪を得るために行うのではない。農業や治水とも有機的につながっている。植林自体が目的ではなく、「生活」を豊かにするために植林をするのだ。農民たちがこれらの関連性を理解してくれるかどうか植林の成功の鍵だ。

ところで日本人の生活にまい戻って考えてみた。自分たちの生活をとりまく諸要素の関連性を理解しているのか。私自身に関していえば否である。たとえば「木」についても、情報文化・教育を支える「紙」という形で浪費しているし、日本の木材需要が東南アジアでの森林の濫伐を促しているといわれてもピンとこない。情報として耳には入ってきても私自身の日常生活とは無縁だという感がぬぐいえない。「食」「水」「農」いずれをとっても同様である。

このプロジェクトはエチオピアの村人のためというよりは私たち日本人のためのものかもしれない。村人が「木」「水」「農」「食」の関連性に気づいてゆくとするなら、その過程の中で私たちは大いに勇気づけられ、自らの生活の足もとを見つめ直す機会とすることができるだろう。まずは対話、キャッチボールから始めてみよう。

再びソマリアへ



税田 芳三

6月の半ばから UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）勤務となる。赴任国は、またしてもソマリア。自分から選んだ結果である。「そうかおまえはそんなにソマリアが好きか」と問われても困る。まだ「好きだ」と言い切る自信はどこにもない。宗教が違う。文化が違う。習慣、言葉が違う。色々なことが違っている。最近では、もしソマリアを本気で知りたいのならイスラム教に改宗しなければ無理だろうなと思う。2年と7カ月居た間、食物で泣かされた。

乾燥地での苛酷な自然はぼくの寿命を確実に縮めてしまっただろう。「それならなおのこと、何故戻らんのだ」と問われたら、「わからないことが多すぎるから。自分の中にやり残したことがあるから」と答えた。

ソマリアは世界で二番目に難民が多い。その数、約85万人。これは国民の6人に1人がオガデン地方からの難民であることを示す。UNHCRの85年度支出は総額1473万ドル(約30億円)。ところが開発の視点から難民の自助努力を引き出す内容のものは1%未満にすぎない。政府はオガデン闘争から8年を経た現在、まだ同胞である難民をお荷物扱いにしている(ただし兵力としては抱えているようである)。一方、民間ベースでは昨年、初のNGOが誕生した。ILOからノウハウを学んで独立した団体である。ソマリア人自身の手による自助努力はようやく始まった。昨年OAU(アフリカ統一機構)が作成したアフリカ経済復興優先計画(86-90年)が示すように、ソマリアもこれから新しい段階に入る。その推移の中に身を置きながら世界を考えてみたい。

ぼくはすでに人生の5%をソマリアとつきあった。信じれる友も得た。そうして何よりも自分たちの暮らしを少しでもよくしようと努力している根底の人人にふれた。日本に生まれたぼくらが学ぶことは多い。今回JVCを離れた立場で難民問題と取り組むことになったが、過去6年間JVCの中で得た蓄積を十分に生かし、国際的に評価されうる仕事をしたい。

石を投げた子ども

工藤 美美子



アジバールから車で15分、私達の宿舎のあったテナタでミュージック・フェスティバルがあった。「お祭り」を期待して行くと、村の公民館では踊りが始まっていた。地域ごとに、民族衣装や軍服らしき服装で舞台に整然とならんでいた。東アフリカの様な明るいリズム感はなく、北アフリカの妖艶さもない。暗い印象が強い。

後半、幾つかのドラマがあったが全て物語は一緒に、貧しい人が飢えて倒れている。最初に来た人は無視して去った。次の人はお金か物を与えた。三番

目に来た人は、JVCかワールド・ビジョン(W.V)に連れていくという話だった。そして最後に、「JVCは医療援助を、ワールド・ビジョンは給食をしてくれています」というナレーションが入り、皆が拍手をして終わった。言葉はアムハリックだが、「JVC」と「ワールド・ビジョン」という言葉だけ聞きとれた。

外国人は、たまたま見に行った私一人だけ。あの劇は、あの時期のトビックスをとりあげ、啓蒙的な意味があったのだろうが、それにしても「救援」が人々の生活の一部になっていると感じた。

その頃、アジバールには、家や村を捨てて2万人の人々が集まっていた。しかし町の中にも貧しい人や孤児が、家々やバーに物乞いをしてまわり、道にはおなかをすかせた子供が異様な声で泣いていた。人々は「責任を持ってないから」と通り過ぎていった。

テナタに全盲の15歳の男の子がいた。やせ細り、汚れてしらみだらけ。バーやレストランをまわって残飯をもらい、夜はどこかの軒下をかりて寝ていた。ある夜、バーの従業員とお茶を飲みながら話をしていると、その子がやってきた。甘い紅茶の入ったコップを手を持たせると、にっこり笑い、冷たい手を温めるようにゆっくり飲んだ。その日からその子は私の部屋の前で寝るようになった。病院で出る昼食用のパンを半分残して持ち帰った。それと紅茶一杯。これも許されないのだろうかと思問自答していた。子供の髪を切り、体を洗わせた。一枚の毛布も与えた。夜になるとやってきて話をするようになった。

そんなある日、私はホテルの中から子供に石を投げられた。全く知らない子供だったが、その子は私の事をずっと見ていた。10回以上も盗みで警察の世話になっていた孤児だった。皆になぐられて、「僕もパンが欲しかった。毛布が欲しかったのに、あの子にしかあげなかった」と言った。

私達のいた一年間は彼らにとって何だったのだろうと思う。「昔は子供達が人に物をくれなんて言わなかった」と、外国人を見るとしつこくついてまわる子供達を見て嘆くエチオピア人もいた。

勉強不足の私にとって、「検証アフリカ」は興味深く、知識を得ることが出来、満足して帰った。しかし、実践とあわせて考えてみると平行線をたどってしまう。その接点を作り出すのが、現場でかかわった私達の責任であるのかもしれない。そのためには現場で、または帰国後グループ・ワークを行ってからシンポジウムに臨めば、理念と実践のまとまりが出てくるのではないかと思う。

私たちの仕事



荻野 美智子

シンポジウムは、風邪で高熱にうなされ、残念ながら欠席した。当日のテープを聞き終え、この原稿を書いている。

84年の12月から、85年の7月までの8カ月間のエチオピア滞在中で、アフリカの問題を語ることは大それたことである。

先日、エチオピアで大変お世話になったエフレムさんに約10カ月ぶりにおめにかかった。彼は今、日本政府の補助で井戸掘りの研修生として、3カ月間東京、その他の地域に滞在することになっている。「ミチコ、エチオピアはどうでしたか？」彼の質問。「残念ながら…」と私はきり出した。「8カ月という短い期間であったし、JVCとしても初めての活動で、仕事、仕事に追いまくられ、エチオピアのことを、人々のことや文化、言葉をよく知ることなく終わってしまいました」「休みの日には、ドライブに連れて行って、気晴らしを手伝ってくれる人達もいたけど、次の日の仕事のことを考えるとほんとうに楽しめなかった。次に行く時は、長く深く、エチオピアを知りたい」と答えた。

自分の国はどうだったかとたずねられて、「素晴らしい国でした」と言えないことは辛い。事実として「やはり、充分にはいりこめずまだまだわかりません」と言いながら去ってしまったことは残念であった。あのクタクタの疲労感、忙しさ、必死でやった「仕事」というのはなんだったのか？

シンポジウムに話されたアフリカの問題はあまりにもいろいろなことがからみ合い、私個人はもちろんのこと、JVCという団体が立ちむかうのは、まるで大きな象にむかうアリのように感じてしまう。非力な自分にガッカリする。

実は私は、今、JVCを一旦離れて、国連への就職準備をしている。2年という期間、国連の中で修業をさせてもらおうつもりだが、国連から、実のところ多くを期待していない。語学の研修をさせてもらおう（語学研修は無料という話。仏語はイタダキ）。国連の人件費、事務経営の増大で肥大した事務局の

部分が実際の困窮にある援助を必要としている現場の人々にどうつながっているかを疑う声がある。自分の眼で見定めたい。

はてさて、ここで1つ考える。私たちの「仕事」、「いい仕事」とって何なのだろうか？ いい仕事をするために「実力」をつけたいと強く感じる。その「実力」とはなんなのだろうか？ 語学がうまく操れること？ 専門技術があること？ 相手国政府や国連その他の団体とうまく渡りあえ交渉ができること？ 物質の手配をうまくやれること？ それらも大切なことだ。それらすら満足にはできない。英語をうまく操るエチオピアの高官と交渉しててもむなしさはつのるばかりだ。自分達の言葉さえ書けない人の悲しみ、苦しみを彼らは知っているのだろうか？ 私たちはアフリカの人達に何ができるのだろうか？ 代表の岩崎さんは、認知の知覚を広げて、アフリカの人々と友達になることだとシンポジウムでも言っている。しかし、医者と何の技術もない人間なら、対象者にとって、医者の方がありがたい。語学ができて、少しでも多くの食糧を獲得してくれる方が実際助かる。貴重な募金の使い途としては、対象者に役立つ人を送るべきであろう。しかし、しかし、自分の実力を棚に上げるわけではないが、私達は、食糧の仕出し屋ではないし、語学のことで言えば、英語国民が全員この仕事ができるとは思えない。

私の焦りは、事務的なことすら満足にできなかったことプラス、「事務的なことがうまく行かないのも無理はないよ」と思うぐらい、肝心のエチオピアの人と深くかかわれなかったところにあると思う。忙しさにかまけ、語学を学ばず、多くの友達をつくれなかった。本当に苦しむエチオピアの人と充分話さず、表面的な手配師にとどまった。そんな状態でぐりぬけた後に残る苦々しさ。これでは人々の気持ちを組み取り、状況を把握して、彼ら自身では充分できないことを彼らに代わってすることができようか？ 彼らの眼で、彼らの胃袋で、彼らの感覚で。

私はもちろんアフリカの人々と友達になりたいと思う。しかし今の状態では彼らから得ることのみで、“Give and Take”は成り立っていない。身勝手な友だちである。切磋琢磨しなければならない。この意味において、岩崎さんの言う、「心と身体的一致」もアタリだ。

突破口のない難問に何とか打開策をと頑張っているアフリカの友達に、こちら実力をつけて答えたい。

マーシャ村の皆様、どうぞよろしく

伊藤 幸子
(農業技術者)

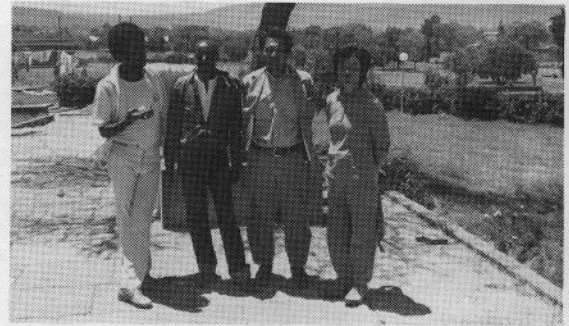
村に入る

4月1日、アディスよりマーシャへ向けて出発。これから三週間、本格的に村の生活に入る。マーシャ行きも何度か経験するにつれ、はげ山の峠越え、長時間の低地ドライブ、そして終り近くに続く断崖絶壁の穴ボコ山道にも、いちいち青ざめずにすわっている。いや、この揺れで居眠りさえできるようになったのだから、たいしたもの。今回は番犬、家畜番として活躍する予定のエチオピア犬・ナナを同伴。生後3カ月位。

アジバールの倉庫からベッド、毛布、ナベ、カマの類を車に積み込み、最終地まであと一時間のドライブ。この間4-5本の川を四輪駆動がブリブリ言って渡る。さすが力強い。けれど大雨季に入るとこの川の水量が増し、急坂がどろでめちゃくちゃになると、この機械もたちうちできなくなってただの箱になってしまう。昨日来る途中、ヒョウが降ったものの今の川はおとなしい。うまそうなカモが泳いでいたりする。(エチオピアの人の言うところによれば、かれらはツノのあるものは食べるが、ないものは食べない。そういえば彼らの好物、羊・牛・ヤギにツノあり。馬・ブタにツノなし。カモにツノのあるはずもなし。ネギを用意すべし)

さて、はげ山、畑の山をいくつも通り抜け、犬の攻撃やヤギ・羊の集団横断などに出くわしてマーシャ村に着く。臨時で借りた家は、村の入口の広い草地の中にデンとあるモデルハウスだ。丸型、草でふいた屋根は補修されていてだんだら模様。大部屋1、小部屋3、台所1、壁は泥とほし草を混ぜて塗り固めてある。一つの部屋の一つだけの窓。これだけ大きな、木もいっぱい使った家を建てて『モデル』と見せても、一体村の誰が作れるのか。特別にトイレも敷地のすみに作ってもらった。井戸もここから歩いて5分程。トイレあり、水あり、でかい家あり、ランプも料理用のケロシンストーブもあってまったく申し分なし。荷物を部屋におさめる。

その頃になると、近くの家からぞろぞろ子供たちが現われてくる。水がめを背おった女たちや、杖を持った男たち。「チャイナ、チャイナ」または「ミスター、ドクター」とはしゃぐ声。はなたれ小僧も元



右端が著者

気そうだ。仲良くしてね、よろしくねと言いたいところを笑顔であいさつ。

一人の魔法使いのようなおばあさんがビニールのつつみをさし出すから、なんだと開けてみると中に卵。スタッフの一人が「この人がこのモデルハウスの管理人です」と教えてくれる。握手をし、おじぎをして初対面のあいさつをすませ、ここの相場でこの卵をわけてもらう。このあと、誰かかれか、卵を持って我が家をたずねてくるようになった。今エチオピアは、肉・卵・バターの種類を断つ“断食の月”にあたっている。

雨漏り

荷物もかたづきスタッフもそれぞれ村の中に借りた家に帰っていき、好奇心あふれた子供たちも家に戻ってデカイ家に亭主と二人。持っているケロシンランプは使い方を知ったものの、経験不足と知らないこわさで、今晩は使用中止。ロウソク一本のあかりのみ。圧力ナベでご飯を炊き、手に入れた卵でおかずを作る。すきま風が高い天井をぐるぐるかけめぐる。なんて寒いんだ。ベッドの寝袋にもぐり込んだのが、きつと8時を少し過ぎた頃だったか。一日目は、でも快適に過ぎた。二日目の夜中、雨。ケツ。はじめ台所の方からポツン、ポツン。そして廊下で、そして隣の部屋でもポツン、ポツンの音。音が重なっていいよ我が部屋にもポツン登場。でもこの雨はなかなか良心的で二時間もすると帰ってくれた。三日目の晩の雨ときたら、しつこい。バケツやナベや洗面器にもすごい音。ベットにビニールシートをかぶせて寝たものの、まるで外に寝ているよう。屋根の補修はすんでいるのどこから入ってくるの

か。それで次の日。二度目の引越し。運の良いことに、来年から使うけれど今はあいてる建物の一部屋が借りられた。この家は四角いどろ壁、トタン屋根。屋根が低い分それだけ暖かい。夜降り出した雨も漏ってこない。安心、安心。と満足していたら、今度は村の井戸がこわれたというニュース。まだ作ってまもない村の井戸なのに、これで二回目の故障だという。村の女性は、川に、泉に、にぎった水を汲みに重いかめをしょって行かねばならない。私たちは、運よくトタンの屋根を流れる雨水をドラムかんにためることができて、これを使えばいい。どこの家にも雨水をためる大きなかめがあれば、雨季の間だけでも女性の仕事が楽になるのに。水の入ったかめをさわらせてもらったけど(とてもかつげない)、力だけはあってもウツになってしまう重さ。それをか

ついで私などにニッと笑って手を振るのだから。あの重さ、あの重さ。あの笑顔、あの重さ。

村人たち

ソロモンと我が亭主が植林予定地、苗床予定地など、連日山を歩いている間、私は村の中をのぞいて歩いた。粉をひいているおばさん、インジェラを焼いている娘さん、かごづくり、糸つむぎ、機織り、ミシンふみのおじさんたち、2頭の牛をあやつって畑を耕している少年、けんか腰で「おれをやとえ」といい張るおにいちゃんにも会った。歌とおどりを庭先で披露してくれた子供たち。トイレに行くのでさえ10人、20人の子供たちが私を囲む。

この人たちとこの村で一緒にこの先何年か働いてゆく。どうぞよろしくお願いします。(4月23日)

エチオピアひとくちメモ

・断食・

エチオピアの宗教は、主に低地域でイスラム、高地の方でキリスト教、そして土着信仰があります。イスラム教徒は、その教義にのっとり、断食を実行していますが、ここでは、キリスト教徒の断食を紹介します。

エチオピアのキリスト教は、エチオピア正教会、又はコプト教、と呼ばれ、4世紀頃に伝わった後、かなり独自の色合いを持ちながら発展してきたものです。その特色の一つに、断食日が随分多い、ということがあります。例えば、普通の週でも、水曜と金曜に、それぞれ、ユダヤ人の陰謀、キリストの受苦日を忘れないために、断食をします。大きなお祭りの前にも断食をします。クリスマス前に45日間、イースター前に55日間…そしてこれら断食日の総計は年間でなんと240日にもなるのです。

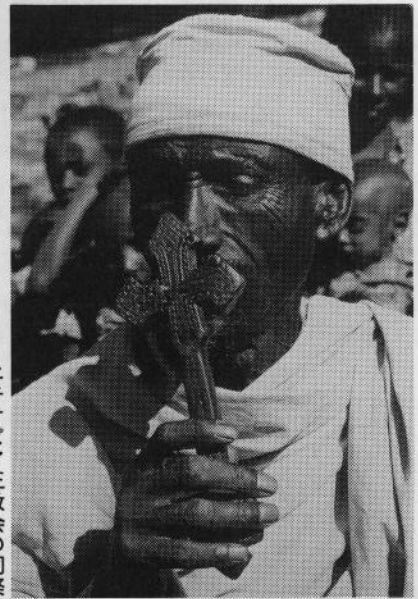
これだけ聞くと、なんて大変な、これでは干ばつでなくても、おなかがすいてたまらないんじゃないか、と思うでしょう。しかし断食というのは、ちょっとした言葉のあやで、実はこの期間中、何も食べない、ということではないのです。イスラムでは、日のあるうちは物を口にできないのですが、エチオピア正教では午前中には食べてはいけないうえ、となっています。それと、彼らの大好きな四つ足やとりの肉、そしてその産物である卵やミルク・バターを食べてはならないのです。これら以外のもの、穀類や豆・野菜、魚といったものは食べられます。つまり断食、というよりも、ぜいたくをしない節食、といった方があっているでしょう。この習慣は、町でも村でもよく守られており、いつもは肉の煮込みが出てくる食堂でも、断食日中は、豆煮込み、町では魚のフライが出てきます。魚好きの日本人にしてみれば、水・金はアサ(魚)の日、ということになって、かえって心待ちにするのです。

断食節が終わると、そのあとにはお祭りの御馳走が待っています。伊藤さんの通信時は、丁度イースター前の断食

期です(エチオピアの暦は独自なものでイースターの時期も欧米とはずれます)。通常の時であれば、イースターの御馳走は、一年中で最高。食べすぎ飲みすぎでおなかをこわす人も多いそうですが、悲しいことに去年などは、村の人達には、御馳走をする余裕などなかったようです。今年は少しは良くなったでしょうか。(K)

【断食を守る日】

- ・クリスマス前・45日
- ・キリスト受洗日前・1日
- ・ニネベの断食(旧約・ヨナ紀の故事に基づく)・3日
- ・使徒の断食・40日
- ・マリアの断食・16日
- ・復活祭前・55日
- ・水曜と金曜・80日



エチオピア正教会の司祭

スールのキャンプにおけるパレスチナ赤三日月社

イスラエルの侵略の傷が癒えない南レバノンで、ここ数カ月間パレスチナ赤三日月社^{注)}(以下、PRCS)のスール地方での活動が活発になっている。

アル・ラシャディエ・キャンプにおいて、スール地方のPRCS委員長であるサラーフ・アル・アフマド医師に、スールにおけるPRCSの状況についてインタビューを行った。

「イスラエル侵略以前のスールにおけるPRCSの活動は活発で、アル・バス・キャンプに中央病院が、また全てのキャンプに診療所があり、パレスチナ人、レバノン人を問わず南レバノンの住民に対して医療サービスを行っていました。医師の人数も充実していたし、市場で不足している薬が手に入ることもあり、地域での評判はよく、一日に120人ぐらいの患者を受け入れていました。その中で入院の必要な患者は病院に移し、無料で治療を行っていたのです。また病院と無線連絡のとれる救急車や救急部門も整っており、主な役割はキャンプに対する敵の攻撃があった時の負傷者の救出でした」。

占領：条件付きの治療

Q. 治療を行うにあたっての水準と、その可能性はどの程度のものでしたか。

A. 医療水準は地域の病院と競えるほどに高いもので、多くの患者たちがそれらの病院から移ってきました。時には薬やレントゲンが不足している公立病院からも患者が送られてきました。

スールへのイスラエルの攻撃はPRCSにとっても大打撃ではありましたが、われわれはあらかじめ用意していた非常時用の避難所で診療を続け、この地域がイスラエル軍の手に落ちる、その時まで多くのけが人の治療にあたりました。その後、敵が民間人をスールの町の避難所に移し始めた時点で、われわれは赤十字に援助を求めためベイルートにあるPRCSの本部にここの現場の写真を送りました。しかし当時はイスラエルの攻撃がベイルートやサイダにまで及んでいたため不可能でした。そこでわれわれは停戦の間にスールの町の避難所まで退き、その間に患者や負傷者を救急車で包囲された赤十字のセンターに移しました。そ

のセンターではベッドと毛布を保障してもらい、約1カ月間活動を続けました。

しかしその後イスラエルからの要請で、赤十字側はPRCSの病院の再開とひきかえにわれわれの撤退

を要求してきたため、病院は負傷者の治療以外の目的を持たないとの条件つきで再開の合意に達しました。また爆撃によるPRCSの病院の受けた被害の調査の要請に対しても赤十字は援助を約束しました。が、スールでのわれわれの活動を妨害する者のたくらみで、イスラエル側は病院再開の中止を要求してきました。

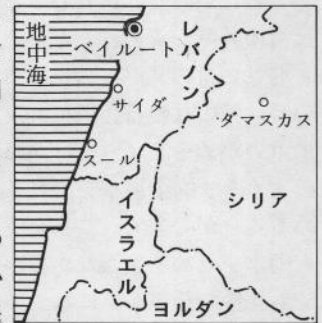
こうしてわれわれは病院再開にかわる何の保障もないまま赤十字センターを離れたのですが、秘密裏に救急車内でのけが人の治療を続けました。

敵の秘密警察の訪問

Q. 占領下でもPRCSとしての活動は続いたのですか。

A. 占領下のスールでは、存在を占領軍に気付かれないためにPRCSの名を隠して活動しました。大部分の職員がまだPRCSに所属していましたが、イスラエルの秘密警察は彼らに政治的・軍事的な活動はせずに医療活動のみに従事するように要求してきました。そしてかつてのPRCSの南部海岸地域のセンターであったスール病院でのわれわれの活動も、ごく初歩的なものに限られました。当時の状況はとて厳しく、廃虚と化した診療所を再建するために必要な薬や器材の調達や、ベイルートの本部との連絡に苦労しました。それでもわれわれは本部との連絡を続けることができ、断続的ながらも現場の状況を報告したり、活動を続けるための指導やアドバイスを受け取っていました。

占領下の状況は単純なものではなく、いろいろな障害がありましたが、われわれの活動に対する熱意はそれ以上のものがあったのです。



注) 英語名はPalestine Red Crescent Society。アラブ諸国では「三日月」が「十字」の意味をもっている。各国の赤十字に相当する。

一週間ごとにイスラエル秘密警察の地区の署長が病院にやってきて、勤務体制や勤務時間内外のわれわれの動向や、患者の氏名やけがの状況、またコマンドに対する治療禁止令が守られているかどうかを調べました。

Q. 敵の撤退後も障害はひき続きありましたか。またスールのPRCSの活動は再開しましたか。

A. 撤退の2～3日後にPRCSレバノン代表であるウンム・アル・ワーリド女史がスールを訪れ、われわれとの間でPRCSの状況、施設やスールのキャンプで必要な医療活動についての話し合いが持たれました。彼女は真の協力と大衆に対する共通の責任というものを強調しました。これはわれわれに占領下での困難を忘れさせましたし、また彼女と職員の会見は、スールのキャンプにおけるPRCSの活動の再開への努力を促すよい機会となりました。これに加えて、以前よりもいろいろな障害は少なくなってきました。

Q. ウンム・アル・ワーリド女史との協議で何が最も重要な結論でしたか。

A. ベイルートとスールの間で行われた数回の状況調査の後、アル・ラシャディエ、アル・ブルジ・アッシャマル、アル・バス、アル・カーシミーヤのすべてのキャンプに段階的に診療所を再建してゆくことが決まりました。また占領下ではドクター・サアドラー・アル・ヒラール病院と呼ばれていたスール病院の活動の続行も決まりました。

ここでPRCSのレバノン代表、職員の方々、そしてノルウェーとスウェーデンの医師団「ノリック」のメンバーに対して感謝の意を表明したいと思います。「ノリック」は、スールの診療所の機能を回復するために多くの物質的援助を行ってくれました。

こうしてアル・ラシャディエ・キャンプとアル・ブルジ・アッシャマル・キャンプの診療所がで



難民の治療にあたるパレスチナ人医師（UNRWA 提供）

き、昨年10月初旬の開設までに、アル・カーシミーヤ・キャンプの診療所とともに、二カ国の医師団によって必要な器材がそろえられました。また患者の診察や薬の面でも彼らからの協力を得ています。現在スールの診療所ではいろいろな不足にもかかわらず、日に60～80人の患者を受け入れています。

すべてのキャンプに総合病院を

Q. 今までの活動経験から見て、これからのスールにおけるPRCSの活動強化の可能性については？

A. これまでの状況を考えてみても、未来の展望としてはそれぞれのキャンプに総合病院を、そしてスールに中央病院を作るべきだと考えており、それに関する一連の取り決めをしているところです。われわれの目的は、われわれパレスチナ人の存在するあらゆる所に診療所や病院を開設することです。現在の診療所のみでは患者の入院も困難で、かつ通常の治療にも事欠いているからです。

PRCSと国連パレスチナ難民救援機関

Q. キャンプでの医療活動は、PRCSのみで足りているのでしょうか。あるいは、国連パレスチナ難民救済事業機関（以下、UNRWA）が何らかの役割をはたしているのでしょうか。また両者は協力関係にあるのですか。

A. 御存知の通り、UNRWAからの援助は減少しています。彼らはすでに、パレスチナ人の患者の市立病院での治療への援助——その額はレバノンの物価の上昇からしても、かなりなものになるのですが——を停止しています。われわれはUNRWAが、仕事も限られ苦しい状況におかれている南レバノンのパレスチナ人に対する援助を再開してくれるように願っています。UNRWAのパレスチナ人医師がわれわれの状況を理解し、UNRWAの費用だけでは完全な治療ができないこともあるのに、パレスチナ人の患者の市立病院での医療費をUNRWAでたてかえるように努力してくれていることに感謝しています。

またわれわれはUNRWA以外の人道的組織とも良い関係にあります。赤十字の代表者とも定期的に連絡をとっており、彼らはわれわれの診療所に対して医薬品などの援助をふやしてくれています。治療費や薬代の払えない貧しい人たちのためにも、彼らのより一層の協力を期待しています。

Q. 医療面に加えて、地域に衛生観念を広めるためにPRCSとしてはどんな役割が必要とされていますか。

A. われわれはまだスタートしたばかりです。PRCSには人々に衛生観念を広めるための活動をする予防科というものがあり、ウンム・アル・ワーリド女史との話し合いで同科の開設が決まりました。そして当地のPRCSに属するそれぞれの診療所にこの予防科を設け、健康管理指導を行うとともに、子供の病気予防、妊婦の健康管理にあたることにしました。

われわれはこのように少しずつ不備を補っていきたいと思っています。

パレスチナに一番近い土地

Q. 最後にPRCSに対して何か一言。

A. われわれがPRCSの同志たちに言いたいことは、スールが祖国パレスチナに一番近く、そしてここもベイルートやサイダと同様に被害を受けたということです。そこでこの地域に対して、以前よりも多くの援助をお願いしたい。またわれわれは、他の地域とスールの扱いが平等になるように願っています。

ボルジ・アッシュマールの診療所

ボルジ・アッシュマール・キャンプでは、カイロ大学医学部卒で同地の診療所で働くガッサーン・ヒンディ医師に診療所の状況について尋ねた。

「毎日、現在の診療所の能力を越えた人数の患者が来るため、現実的に診療所の増設がせまられています。しかし以前には人口が1万5000人を越えるこのキャンプに診療所すらありませんでした。

今でもキャンプの中を回ってみると、風通し、陽当たり、栄養、衛生そして上下水道の施設などの衛生環境が整っていないことがわかり、これは当然個人の健康に影響を及ぼしています。また人々の社会的・経済的状況を考えてみても、今まで以上の医療活動が必要だと思えます。

1982年の戦争以前には、ここにはいくつかの診療所があり、キャンプ周辺に限らずベイルートを含めたレバノン全土に対して活動を行っていました。イスラエル撤退後PRCSが動き出すまでは、UNRWAの医師による診察のみで、それも一週間のうちに断続的にしか行われず、時には医師次第というものでした。このような理由もあって、PRCSの診療所が

多くの患者を受け入れざるをえない状況にあるのです」

Q. どの分野の疾病が多いですか。

A. 皮膚病に関しては衛生状態が低下しているにもかかわらず減っていることに驚きました。季節による病気としては、夏には腸の障害(下痢)、冬には肺病、風邪などを治療していますが、想像したほどの重症者はまだ見かけていません。

Q. 診療所に来る患者たちはどのような問題がありますか。

A. 患者の病状を知るために回診をしてみると、彼らから苦情が出る。これは彼らが、医者というものは患者を診察せずに薬を与えることができると思い込んでいるからなのです。これは彼らがUNRWAで得た経験を考えれば当然のことかもしれませんが。私自身も子供のころそこに行ったことがあります。医者は列になった人々を次から次へと、まるで名前を記入するかの如く見てゆき、誰にでもきくような(ありふれた)薬を与えるだけだったのです。こうした経験が彼らに対しての間診や検査を防げているし、無料の医療というものに対する彼らの疑いを生み出しているのです。「ただほど高いものはない」と信じている人々がいるのです。この問題は、長い目で解決していかねばなりません。

Q. ボルジ・アッシュマールのPRCSの活動のこれからの展望についてはどうですか。

A. 医療活動は単に診察、投薬、検査あるいは統計といったものではなく、社会的にも科学的にも十分な健康管理が必要だと思えます。つまり医療活動のレベルの向上のためには人々の健康(衛生)に対する認識が必要なのです。

たとえば下水処理、陽当たり、正しい栄養のとり方、子供の栄養、病気の予防、そして病人の隔離の方法など、普通のレベルの医療活動で病人を減らすことができます。

ところで、いつ人々の需要に応えることができるかについては、外的要因を除いて時間のみで決めることはできません。PRCS内部の要因としては人間のレベルの問題があります。しかしわれわれはいろいろな困難に打ち勝って人々の要求に応じていかなければなりません。外科でも内科でも、どんな患者もキャンプの中で十分に治せるようになる時こそ、本当の目的を達したことになるでしょう。

(フィラスティーン・アッサウラ誌 '86 1月号より)

アンコール・ワット 代々木

レストラン探訪 ④

代々木の駅から歩いて2-3分。代々木ゼミナールを過ぎて真すぐ下って行くと、右側に「アンコールワット」があります。駅からの道の両わきには飲食店が並び、若者が大勢行き来し、たいそう賑やかな所です。

店主のゴーミントンさんは1981年1月、奥さんのリーブンニーさんと5人の子供を連れてタイのキャンプから日本に来ました。ロン・ノル政権下では貿易やレストラン、ホテル、工場の経営と手広く事業をしていたとのことで、日本に来たきっかけも貿易の仕事で関係のあった日本人が保証人になってくれたからだそうです。以前仕事で何回か日本に来たことはあったとはいえ、それでもやはり住んでみるとはじめは言葉や、冬の寒さ、食べ物の違いに苦労したと話して下さいました。

お店を開いたのは1981年6月。このレストランはカンチアの難民が最初に開いたお店ということで新聞にも載り、オープンの際は各テレビ局が来てニュースとしてとり上げてくれたので、2カ月位は大変忙しかったそうです。今でも1日90人以上のお客さんがあって、夕方5時頃はお店も一杯だそうです。その内70%位が日本人、20%が東南アジア、あとが欧米人のお客さんだそうです。お店の中はアンコール・ワットの写真やヤシの皮で作った民芸品等が飾られていて、私もテレビで見たことを思い出しましたが、広さとしては25~30人のお客さんが入れる位でしょうか。

お伺いした時はちょうどお昼過ぎで、ベトナムやタイの青年が昼のお勧めメニューの鶏カレー(520円)や焼鳥定食(480円)、焼クッティウ(550円)を食べていました。私はスープに入っている方のクッティウ(米粉から作った麺)を注文しましたが、ソーメンより少し太い白い麺で、さっぱりしたスープに干しえびのうま味がよく出ていました。カンチアの人は朝仕事に出かける途中、自転車でお店に立ち寄って、このクッティウを日本の立ち食いそばのような感覚ですってから行くのだそうです。春巻(1本250円)の皮も米粉から作りますし、家庭料理の中では魚や肉の保存に米粉を炒って塩とつけ込み、なれ寿しのような使い方もするなど、さすがお米の国だなあと感心しました。4月13・14・15日はカンチアのお正月ですが、この時はもち米に豆や豚の脂身、えびを入れバナナの葉っぱで包んで蒸し

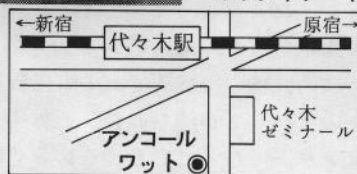


(右)ゴーミントンさん



(左)人気のカボチャケーキ

〒151
渋谷区代々木1-44
-12 ツキノビル1F
03(370)3019



たものを食べるのだそうです。このお店で食べられる五目チマキ(320円)はカンチア風と中華風の中間の味とのことでしたが、これは日本人なら誰でも好きに違いありません。それから夕方からのお勧めメニューとしては、五目春雨炒め(680円)、生牛辛サラダ(850円)、牛肉串やき漬物付(850円)、鶏肉辛カレーさつま芋入(750円)などがあるそうです。暑い国なのでカレーの中にじゃが芋ではなくさつま芋が入っているのがおもしろいですね。デザートにはカボチャケーキ(300円)をいただきました。これもカンチアの人は大好きで夜などよく食べるそうです。

ゴーミントンさんには今高校2年から小学校3年までの学齢の子供さん達がいらっしやいますが、この先できたら短大や専門学校にやりたいという話をしておられました。「日本では学校に行っていないと仕事が難しいからね。もし国が自由になった時は子供達はどうするかわからないけれども、私は国に帰って以前のように貿易やホテルなどの仕事をやりたいです」と話された時には、ふっと遠くを見るような目をされたような気がしました。(吉武)

■私の会った日本在住「難民」 第3回

「私、いまほとんど不満がありません」

ペン・ボンナレさん(21歳・カンブチア)

A.G記

「日本の女の子と同じだね」「そうですね」

— お店が休みの日はどんなことしてるの？

「昼はスポーツして」

— どんな？

「恥ずかしいけれど、エアロビクスをしています。始めたばかりだけど…。夜は友だちと食事したり話したり…」

— 普通の日本の女の子と同じだね。

「そうですね」

ペン・ボンナレさんとのインタビューは、ごくありきたりに始まった。ニコニコと笑う顔は愛くるしく、「苦勞している難民」というイメージはどこにもなかった。

東京新宿から急行電車で30分あまり、小田急線と国鉄南武線の接続駅である町田駅周辺には、いくつものデパートが建ち並び、郊外の一大ショッピングセンターになっている。そのすぐ駅前、繁華街とは逆方向の少し離れたビルの2階に、カンブチア料理の店「アンコール・トム」がある。

店の経営者は、ボンナレさんのお姉さん、ペン・セタリンさん(31歳)。セタリンさんは、シアヌーク政権下にカンブチアを出国、日本の大学、大学院在学中に、2つの政変を迎えた。ヘン・サムリン政権になり、難民として出国した、弟妹3人の生活の根拠とするため、昨年10月にこの店を開いた。今は、妹のボンナレさんと2人で働いているが、近いうちにいとこたちも来るのだという。インタビューは、



ペン・ボンナレさん。アンコール・トムの店内で

このアンコール・トムの店内で、行われた。

「日本、大好き、住みやすい」

ペン・ボンナレさんは、80年8月14日、難民として日本に入国した。入国後は、姉のもとから4年生に編入された小学校に通った。

「小学6年生の終わりごろに、これから昼間働いて、夜、夜間中学に行くということになったんですよ。で、学校にも、いろんな新聞記者が取材に来たんですよ。その新聞を読んだ方が、手紙くれて、それで友だちになったの。」

昼間働いて夜、学校に行くのは自分自身としては当然じゃないかと思うけれど、先生方から見れば不安じゃないかということで、むこうがかってに……(新聞に書いた)。

そのとき、私は19だったのよ。その方はひとつ下で、高校卒業したばかりで18だったんですよ。それで『僕も君と同じような事情で大学に行けないけれど頑張ろうと思っている。君も頑張れ』というはげましの手紙をもらったんです。私もすごく嬉しかったから、お礼を書いたんです」

こうして交際が始まったボーイフレンドが、今、彼女にとって、一番大切な人らしい。仕事の関係で少し離れたところに住む彼とは、月に1度くらいしか会えないけれど、週に1回は電話がかかってくると、嬉しそうである。

「ほかに、友だちはいるわよ」と、彼女の嬉しそうなお話は続く。

彼女が定住センターにいたころ、見学に来た女子中学生と親しくなり、しばらく文通が続いたこと。新聞で見たのか、突然かかってきた電話に彼女が出て、すぐさまその本人が店に現われたので親しくなった女性のことなど。

姉一家(セタリンさんは結婚して、子どももいる)と同居し、仕事もお姉さんと一緒。昼前から始めて夜遅くまで続く仕事。わずか3~4人の友人。日本の女の子なら、欲求不満のかたまりになりそうな生活にもかかわらず、ボンナレさんは「何も不満がな

い。日本に満足している」と明かるく言い放つ。なぜだろう、という疑問を持ちつつ、将来はどうしたいの、と聞いて見る。

「日本人の方と結婚したい」

— どうして？

「ずっと日本に入れるから」

— 日本で、いい国？

「大好き、住みやすいし、食料不足という心配もないから」

ここに至って、現在を幸福に思うのは、不幸な過去があるからだ気づいて、カンブチア時代の話を開始始める。

それまでニコヤカに話していた彼女の顔が急にこぼれ、大きな目に見るまに涙が湧いてきた。

不思議な幸福感のうしろにあるものは？

1975年、ポルポト政権ができてすぐに、ボンナレさんはプノンペンで図書館の仕事をしていた父親とは、はぐれてしまった。学校の教員をしていた母親と7人の兄弟は、母親の生まれた田舎に逃げこんだ。しばらくそこで、慣れないイネ作りなどを手伝っていた。そのころ、上から3番目の姉は、不慣れた環境のため死んでしまった。しかし、ここでは親類も多く、まあまあな生活だったと、ボンナレさんは話している。

約1年後、一家は強制的に移住させられた。その地方では言葉も通じにくく、知り合いの人もなく見知らぬ人の家に、一緒に住まわされた。

やがてポル・ポト政権は、同じ年代の子どもを集め、共同生活をさせながら、仕事に従事させる政策をとり始めた。そのため、一番幼く母親と暮らす妹以外は、一家バラバラの生活が始まった。

その生活は過酷なものであったらしい。

「そのころの友だち、10人のうち、生き残ったのは、3人くらいね。ごはん、1日にスプーン1杯しかないときもあったし…。

手紙もかけない、お金もない、洋服もない。

いつも見張られていて、逃げ出すと、すぐ追いかけて、つかまえる。つかまえると、腕をこうして、うしろでくっつくまでしばらく。1時間くらいじゃない。そのとき、骨ばっかりだから、余計いたい…」

その時代の唯一の楽しみは、年に1回、許されて、母のもとへ帰ることだった、と彼女言う。

「お母さん、指輪とか売って、お菓子を作ってくれました。おいしかった。それを持って（集団生活

へ）帰った…」

ベン・ボンナレさんは、計算すると、全部で2、3回しかなかったはずの“帰郷”を、何度も何度も楽しかったと強調した。それは、厳しかった集団生活の裏返しであり、数少ない母親との鮮明な思い出だからでもあるだろう。カンブチアに吹き荒れたポル・ポトの大量虐殺の嵐はペン家にも及んでる。

「お兄さんは、仕事に行ったまま帰って来ませんでした。お母さんに聞いても分からない。もう帰って来ないよ、と言うばかり。2年くらいたったとき、お姉さん、帰郷の許可が出たとき、あんまり早く歩いて帰って、足が悪くなって、疲れて病気になって、お母さんと暮らしていたんだけど…。あるとき家に帰ってみたら、（下の妹と）3人ともいなくなって、どこに行ったか、分からない…」

父母と彼女をいれて7人の兄弟のうち、生き延びたのは、3人の兄弟だけだったことになる。ヘン・サムリン政権になって、プノンペンで劇的な再会をした3人は、日本にいた長女のセタリンさんをたよって、カンブチアを去る決意をする。それが、80年のことだ。

「子どもは日本人にしたい」

人はたぶん、十代の前半にかけて、自我の根元を作るものらしい。もし、十代の前半において、身近にあるものが、飢え、欠乏、離別、強制、そういったものであったとしたら、今の日本の生活に大満足であるのは、当然のことかもしれない。私たちの回りにも、戦中戦後の生活を語り、現在の日本を“極楽”のようにいう年代がいる。

たしかに、その感慨は一理あるものであろう。物質的な欠乏や他からの強制のない社会を作るのは、人類の長い間の希望であったのは事実だ。その目から見れば、今の日本はたしかにいい国なのである。この繁栄が他国の犠牲の上に成り立っているものでなく、そしていつまでも続くものなら。

「日本の方と結婚したら、子どもは日本人でしょう。あんな不幸な過去を自分のものとしなくていいでしょう。カンブチア人は可哀そう。

でも、結婚しても、1週間か2週間なら、旅行しても、怒らないでしょう。そしたら、もう1度カンブチアに行ってみよう。あのころを生き延びた友だちとあって話してみたい」

そう話す彼女には、もう元の笑顔がもどっていた。

Dear, My Friend

出会ったこと、思うこと

考えさせられた本、映画……について

原稿、お待ちしております（1000字ぐらい）

センサーに捧ぐ

矢野和貴

初めて定住難民の家庭を訪問した。神奈川県厚木市にある雇用促進住宅だった。私が在タイ日本大使館付難民定住調査員という長ったらしい肩書きを持っていた過去3年間、ずっとパナニコム・キャンプで日本定住が実現するのを待っていた家族だ。大変な大家族だったので、小人数に分けて日本へ送るしかなかったのだが、それが故に3年もかかってしまった。私の在タイ3年間に、日本定住予定の難民たちを相手に多くのJVCパナニコム・プロジェクトのボランティアたちが活躍した。そしてこの家族の子供たちはいつも彼らのマスコットだった。

年老いた両親と子供たち、それに長男夫婦の子供たちが集まって歓待してくれたが、案内してくれたS氏が気になることを言う。

「いつもと様子がちょっと違う。矢野がいるからみんな少なからず緊張しているようだ」と。確かに在タイ中は難民たちは日本定住が実現するかどうかの瀬戸際で、私は彼らの希望を断つも叶えるも、まさに殺生与奪の権限を持った目の上のタンコブ的存在と映ったかもしれない。そのイメージを難民たちは未だに私の中に見るらしい。かくいう自分も、難民たちが日本行きのフライトに乗り込むその時まで、いつ彼らの定住がキャンセルになるか分からぬ不安（実際、渡日前夜になって病気が発覚し、あわやキャンセルというケースもあった）の中で、極力彼らに情が移らぬようにと、彼らとの間に自ら壁を作ろうという心理をいつのまにやら働かせていたのだが。

さて紙数の都合で話は帰り道のことに移る。その家族の中から、15歳になる娘が一人、私たちをバス停まで送ってくれた。何の話題だったかよく思い出せないが、「恋人でも作ったら。楽しいよ」と私が冗談を飛ばすと、一瞬の沈黙の後、「キャー！」と嬌声をあげて私の腕をひっ掴んで振り捨てた。その時頭からバケツの水をかけられたように、ざぼりと昔の記憶が甦って、危うくわけのわからぬ声をあげ



そうになった。

'80年7月。JVCプリラム難民キャンプ。難民たちの中にティタンという名のクメール人の男の子がいた。当時8才。女の子と見まごう、愛らしい瞳をしていた。プロジェクト遂行の理由などどうでもよかった。朝、キャンプへ入る。ティタンが駆け寄ってくる。抱きあげる。それでその日が始まり、次の朝ティタンと会うためだけにその日を終えた。たったひとりりでよかった。

その娘に腕を掴まれた時、彼女の量感が体に伝わり、私は5年以上もの永い間忘れていたものを思い出したらしい。ほんのしばらく難民たちの未来を左右できる権限を握ってしまったために、へたをすれば一生忘れてしまっていたかもしれない質感を。

パナニコムで働いていたボランティアの皆さん、あなた方は難民たちから敬愛の念を込めて「センサー（先生）」と呼ばれていましたね。では私もそう呼びます。

Dear My Friends！ 3年間、本当にお世話になりました。心臓病発覚のために日本へ行けなかった難民のために泣いてくれたセンサー、元気でやっていますか。僕としめし合わせて、予定になかった難民たちを定住調査団に引き合わせたセンサー、あれは大成功でしたね。難民の滑稽な失敗に笑い転げていたセンサー、難民も笑ってましたよ。

難民たちと肌が触れあう時のあの重さを知っているたくさんのセンサー、またどこかで難民たちと一緒に僕らのパフォーマンス。やりましょう。

新しく、小さいJVC

テリース・カオエッティ

私が JVC に来たのは、非政府組織 (NGO) としての JVC に対する興味からというよりも、どちらかといえば、タイ・カンブチア国境にいるクメール人と関りたいと望んだからです。私は 6 年にわたって難民と活動してきました。この間に私は、自分のエネルギーを難民に集中して、運営面への関与とか必要以上の争いはでき得る限り避けるようになりしました。私にとって、運営 (管理) とは官僚主義を意味していたし、現場の人間を支える能力に欠けるものでした。ところが JVC での過去 8 か月間に、私はクメール人と活動しているのと同様の興奮を、この組織に対して覚えている自分を見出しています。これは全く思いもよらないことでした。

私が最初にバンコクの JVC 事務所に来た時に多くの人々が JVC の “新しさ” と “小ささ” と、そして “組織力の欠如” を弁解し始めました。先程述べた通り、私は単にクメール人との活動を継続したいだけだったので、このことは私にとってどうでもいいことでした。東京事務所のスタッフ・メンバーが現場に来たのは、私が JVC に加わってまもなくの頃でした。JVC の現場要員全員とともに、私達は JVC についての感想と、また、JVC が現場のニーズにより良い形で対処するにはどうすれば良いかを尋ねられました。皆、それぞれ時間を掛けて考え、討論し、また提案したにも関わらず、私はそれほどの変化など期待していませんでした。他の NGO での私の経験では、現場に来るこれ等の “エキスパート” は、現場のスタッフを大喜びさせておいて、何にも変えないで帰るだけなのです。しかし、JVC はそこで止



国境の難民村で (左端がテリース)

まらず、実際にフォローアップに時間をかけ、現場スタッフが考え、話し合い、行動に移すことを奨励します。私は今、現場の要求、論議、そして動向などを説明するために東京にいます。私には、JVC が、ただ単なる NGO ではなく、どちらかというユニークで特別な組織であるということが判り始めています。私は、私自身が難民に関わるのと同様の気持ちを JVC に持っていることを発見して驚いています。

私が今、不思議に思うのは、私が最初に JVC に来た時に、なぜ多くの人々がその “新しさ” や “小ささ”、そして “組織力の欠如” に対して弁解したかということです。これらの特徴は、弱さと言うよりも、強さだということが判り始めているからです。なぜかということ、その “新しさ” の中で JVC は、何故、皆が集まったのか、JVC が達成しようと目指すものは何なのか、というような明確な展望を未だに維持することが可能だからです。その “小ささ” ゆえに、JVC は人情味豊かでいられ、そのスタッフ・メンバーを理解し、支えるのに時間をかけられるのです。結局、JVC の “組織力の欠如” は、受益者とそのスタッフにとって、最も適合した開発・評価、再検討システムに、そのメンバーが継続的に挑戦できるものであるからです。

私は、JVC に関わることに興奮を覚えますが、それは、その “新しさ” “小ささ” “組織力の欠如” ゆえだと感じています。私は、多分、謝まる必要のあるのは、古くて大きく、そして官僚主義的組織の方だと思い始めています。

私は、JVC の最大の課題は、これからにあると思います。JVC は急速に成長しており、また、日本の主要 NGO になりつつあります。これは素晴らしいけれども、また難しい時でもあります。JVC は、そのプロジェクトとスタッフを増やして、それでもなお、この団体を、このように特別な NGO にしている質を持ちこたえることができるのでしょうか？ 私は JVC の成長を見たいと願っています。JVC は、役立つことを世界中で行うだけの限り無い潜在能力を秘めています。私は成長がゆっくり起り、そして、それに沿って多大な配慮がなされてゆくを見たいと思います。

私は T/E の読者からの洞察と提言を楽しみに待っています。“JVC はそのユニークな質を持ちこたえられると思いますか？ もしそう思うなら、どうやってでしょうか？” (原文は英語)

4, 5月の動き

歩け歩け山手線

春らしい陽気に恵まれた4月6日、山手線チャリティーウォークがおこなわれた。これは東池袋や神田で英語を教えている外国人教師らが企画したもので、歩いた実績で寄付を受け、それをアフリカの飢餓救援に役立てようというものである。参加者はあらかじめ友人等のスポンサーを見つけ、一駅歩き通すごとに例えば50円寄付してもらい、といった約束を取り決めてチャレンジする。山手線一周、29駅全部歩くと前例の場合1450円寄付が集まり、スポンサーを2人見つければその2倍入ってくる。欧米ではチャレンジ精神、キャンペーン性、チャリティー色を合わせ持ったこうした企画はよく行われる。今回の参加者は220人。130万円の寄付が集まった。中には一人で11万円も集めた人もいたそうで、それらはJVCのエチオピアのプロジェクトに寄付された。

午前10時、東池袋の公園には約180人が集合。下は小学校低学年の女の子から上は60代の男性までが、新宿方面に向けていっせいに歩き出した。我JVCからも20人ほどが参加。その内4人は劇団JVCの団員で、初舞台となった。この日は緑のTシャツを着、ドーランを塗ってストリートマイムを繰り広げた。ウォークの途中で時々立ち止まっては壁を伝うまねをしたり、通行人と遊んだりしたそうだが、先々で化粧品の宣伝員に間違われたり、マイムの後は走って集団に追いつくという繰り返して、とにかく疲れたという感想だった。



ETV 8 — 開発問題を考える

4月21・22日の両日午後8時よりNHK教育テレビで「ETV 8 — 開発問題を考える」と題した番組が放映された。フィリピンのマルコス疑惑を機に、このところ日本の海外援助を見直そうという気運が出てきてはいるが、まだまだ第三世界の問題を扱った番組は少ない。

第1夜はODAのあり方について、外務省の藤田公郎氏、早稲田大学の西川潤氏、同じく菊地靖氏、

チャリティーウォークに対しては意外に年配の人が理解を示してくれ、話しかけたり「頑張ってください」と励ましてくれた。また行列を見つけた電車の運転手さんが、ライトを点滅して声援してくれたりということもあった。出発点に近い新宿あたりでは日曜日の歩行者天国で人通りも多く、興味を持って見守ってくれる観衆がいるといった具合で、全員歩くのも張り合いがあったのだが、品川、有楽町と歩き進むにつれて多くの参加者が次々と電車で帰って行った。仲間が減った上に人通りも寂しくなった夕暮れの街ではとても足が重くなる。



やっと終点池袋のサンシャインビルの灯が見えた田端付近では皆一様にホッとしたようだが、それも束の間、高層ビルは実際以上に近く見えるために、行けども行けども近づくことが出来ないといわかった時は一番苦しかったという。参加者の勲章は足の裏のマメで、三日間痛みが続いた人もいた。

今回のようにしてとにかく全コース29駅34キロを完歩したのは50人。最後の人は夜9時過ぎまでかかった。その後は東池袋のスクールオブビジネスでパーティーが開かれ、お互いの健闘をたたえ合った。会場ではJVCのバザー班よりタイの山岳民族の民芸品や古本の販売も同時に行われた。

東和大学の室靖氏がそれぞれの立場から問題を提示された。第2夜は同じメンバーでNGOについて話し合われた。ここでは海外の代表的なNGOと、日本のNGOが紹介された。この中で星野事務局長はNGOの存在、活動を日本で理解してもらうことの難しさを訴えた。しかし日本のNGOもこの5年で3倍の256団体に増えている。今後もテレビのようなメディアで取り上げられればNGOへの理解も深まることだろう。

チャリティー個展の売り上げをクロントイへ

タイに4年間滞在していた主婦が油絵の個展を開き、その売り上げをJVCの地域開発プロジェクト(クロントイ)に寄付された。この主婦は兵庫県宝塚市に住む藤原千恵子さん。バンコクで出会った子供たちの貧しくても明るく健気に生きている姿に打たれ、孤児院などにもバザーの売り上げを寄付していたという。藤原さんは在タイ中は残念ながらJVCの存在をご存知なかったようだ。

藤原さんの個展はチャリティー展と命名され、受付の横にはチャリティーボックスも置かれた。地元紙などにも取り上げられたせいか、かなり話題を呼び4月15日から20日までの期間中の絵画の売り上げ



額は566,680円にもなった。(チャリティーボックスには32,189円)

なおこのニュースは藤原さんの絵の先生で、アートサロン明植の植田和代さんから伝えられました。

第2回上映会 一宮の上団地で



T/E前号で紹介したJVC「はじまるまで待てないプロジェクト」第2回上映会として、4月26日(土)6時半より神奈川県相模原市下九沢・宮の上団地にて、「国境を越えた人々」の上映会および意見交換会を行った。

同団地は、ベトナム人4世帯、カンブチア人8世帯、ラオス人1世帯の計13世帯48人の定住難民の人人が生活しており、団地自治会が主体となって継続的に日本語クラスを開設している。

今回は、映画の上映より、JVCおよび同自治会の両者でそれぞれ行われている定住難民への日本語学習会に関する経験を共有するための意見交換に主眼がおかれた。JVC側から日本語家庭教師コーディネーター森山久寿子が、日本人側と難民との間で発生しやすい相互の意識の相違や誤解の問題・効果的な日本語学習方法について報告した。

団地側からは、自治会長・中川文子さんが自治会の活動として日本語クラスを開設するに至った経緯および現在の同団地内の定住難民との交流状況について報告があった。中川さんによれば、同団地は、以前から様々なリクリエーション活動を含む自治会活動が盛んであったが、定住難民が入居してきた際に、定住難民の自治会活動との関わり方を自治会内

で討議した結果、まず交流するための基盤として日本語クラスを開設することになった、という。その日本語クラスでは、子供のいる母親のために学習中の子守も自治会で引き受けるなど、定住難民全てに学習機会が与えられるよう配慮がなされている、ということである。日常生活レベルの交流についても、相互の文化の違いに対する理解不足による失敗例を含めていくつか紹介された。まさに生活の中での国際交流という印象をもった。

意見交換の中で、最も深刻な問題として提示されたのが、定住難民の就職問題だった。一般に、企業側は定住難民の採用に消極的で、彼らが就職できる業種が、実質的にかなり狭められており、更に採用される場合でも、その条件が日本人と比べて厳しく、彼らの能力を正當に評価していない、との意見が出された。この問題についても、自治会は国、自治体、企業に対して交渉を行っている、とのことである。

UNDROの会議に出席

5月12・13日にジュネーブで開かれた国連災害救済機関(UNDRO)主催の国際会議に、SHAREの本田徹氏が出席された。これは世界の災害救済活動に係わっている世界の主なNGOの代表が一同に会して、それぞれの経験で得たノウハウをお互いに吸収しあおうという目的で開かれたもの。今年が第1回目になる。参加国はフランス、エクアドル、日本、アメリカ、スーダン、スウェーデンの6カ国であった。日本を代表して出席したJVCは昨年度のエチオピアにおける緊急医療活動が大いに評価されて今回の参加となった。(次号に報告します)

JVCプロジェクト

1986年5月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	<p>涉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。</p> <p>機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行</p> <p>JVC説明会 - 毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3日曜日 午後1時～4時</p> <p>学習会 第4月曜日 午後6時～9時</p>	全国社会福祉協議会	<p>岩崎駿介 (代表)</p> <p>星野昌子 (事務局長)</p> <p>柴田久史, 佐々木志保</p> <p>加納 妙, 前川昌代</p> <p>佐久間典子, 古西 勇</p> <p>他15人</p>
日本国内	<p>●日本語家庭教師</p> <p>昨年末～3月にかけての評価作業が未終了のため, 活動が停滞している。大和教室は新たに4月13日より授業を開始。また, 5月11日より, この教室で毎日曜午後12時半から法律・生活相談及び学習会を開始。医療相談も, SHAREの協力により設けた。6月1日付けでアシスタントコーディネーターを1名入れる。機関誌『そんぼっと』は毎月発行されている。</p>	ジャパン・タイムズ	<p>森山久寿子</p> <p>地区連絡係11人</p> <p>他約70人</p>
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡)	<p>●農業による自立促進</p> <p>ユニット4, 20haのうち18haの開墾を終了。ユニット2では拡張のため, 大雨による流失で水路ができなかった所に橋を造る。また, トラクターに依存せず, 現在のくわによる耕作を軽くするため, 牛を使つての耕作を始める。</p>	UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 朝日新聞厚生文化事業団 仏国土をつくる会 創価学会 ジャパン・タイムズ	<p>嶋 紀晶(ソマリア事務所長), 山口誠史, 鴛田三芳</p> <p>中川正憲, 荻ノ迫善六</p> <p>柿原建三, 五十嵐裕昌</p> <p>法橋 亮, 庄司 美</p> <p>J・バーグマン, モハメッド, ラシッド, アオキ, アハメッド, シアッド, ソフィア, シェイクアブディ</p> <p>掛村 均, 榎田秀樹</p> <p>米澤 聡, 石井弘代</p> <p>中路美和子, 千田悦子</p> <p>シュクリ, ハッサン, アブディ, フセイン</p>
マグドール・キャンプ (ゲドー郡)	<p>●補助給食/基礎医療</p> <p>一時下火となったが今年1月に再び広がり始めたコレラを, 雨季前に抑えるためにRHUが中心となり「緊急コレラ対策チーム」が結成され, UNHCRと共にこれをサポートした。</p>		
ジャボレ・キャンプ (ヒラン郡)	<p>●医療・保健/補助給食</p> <p>マグドールでの補助給食の結果を知るために身長と体重の測定をした。個別トイレの作成が進行中。</p>		
ジャボレ・キャンプ (ヒラン郡)	<p>●植林</p> <p>第1段階の植林を終了。同時に植林の学習も進められている。</p> <p>●宿舎/医療施設建設</p> <p>宿舎は倉庫などが完成。医療施設はほぼ完成した。</p>		
エチオピア (ウオロ州)	<p>●総合的復興促進</p> <p>4月15日, RRCとの正式契約を結ぶ。4月よりマーシャ村に入り生活調査・モデルファーム等始めている。RRCに提出した計画書の内容の他に, 農業面ではアグロフォレストリーの実践・普及, 種子銀行, 保健面ではユニセフと共同の予防接種等が計画されている。</p>	朝日新聞厚生文化事業団 立正佼成会 CRDA BAND-AID 西本願寺	<p>内山田 康, 林 達雄</p> <p>伊藤達男, 伊藤幸子</p> <p>内藤のぞみ</p>

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ バンコク事務所	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報、バザー、古本のセール。季刊『ニュース・レター』（英語・タイ語）発行	全国社会福祉協議会 一般寄付	ボンピモン・チャイブーン、カモン・ミンムアン 斎藤美香代、谷山博史 他約10人
カオイダン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 自動車、単車、1シリンダーエンジンの整備と溶接の基礎技術訓練を実施している。また上級の授業として、ボランティア団体等の所有する車輛を修理する作業場を設けている。	UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 妙心寺派宗務所 花園会	常田正行、熊木政江 トンディー・ソムカネ ソムヨット・ラタナタム
国境のサイト2、 ノンチャン (カンブチア 難民村)	●補助給食 緊張が続いているが、まだ昨年のような直接的な攻撃はない。UNBROは、現在サイト2よりタイ国内に近いサイト3を避難地として用意している。現在受益者は、3歳以下3741人、妊婦1034人、結核患者207人、ハンセン氏病患者27人となっている。	WFP/UNBRO	テリース、ブーム、 トンチャイ 蓮尾慶治、仲田奈々子 ソムボン、スピチャ、 エンドリアン、ソムサック スリペン
パナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●文化オリエンテーション ・日本定住予定者 ①日本語学習の基礎（読み、書き、聞き取り） ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的な理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ・他国への定住予定者（イギリス、ドイツ、スイス、スカンディナビア他） ①日本へ行くまでの手続き等の理解を深める	天理教千葉	浜崎妙子、大場きよみ アナン・プッタミリンパーティ
地域開発 (バンコク市内の スラム地区)	●奨学金援助 スラム在住児童が小学校（6年間）を卒業できるよう援助している。本年度の対象者は10のスラムで16校250人。 ●クロントイ図書館 クロントイスラム住民、就学前児童から成人までを対象としている。新図書館建設のため、NHA(住宅公社)と交渉中。 ●移動図書 クロントイ以外の10のスラムで子供向け図書を中心に回覧予定。 ●移動学習センター（プラテープ財団、FFSC、JSRCとの共同プロジェクト） 9のスラムで学習の機会のない子供たちのため人形劇などで教育を行っている。	モラロジーMIRC NTV、JO FIC 庭野平和財団 聖ヨゼフ老人ホーム	ヴェラナット・チュンクル、 サムルエイ・ジョンヨー クラン、アルニー・プロマ、 リーラ・クンナロン、 スワン・リムサンペン、 コメン・スグワン 佐藤正喜
カンブチア (プノンベン)	●カンブチアの人々への総合的人道援助 5月1日より15日まで、プレイベン省バプノム郡での井戸掘り活動に参加し、プノンベ市内第4孤児院の水田のための給水ポンプを設置した。ワークショップ/技術学校については、建設に必要な材料を注文する段階。	日本青年会議所 関東地区協議会、 全国老人クラブ 連合会	熊岡路矢、養田健一
人材派遣プロジェクト			
フィリピン (パターン・プロセッ シング・センター)	・国際移民委員会（ICM）- 第三国定住手続きにともなう医療業務	城西病院	青井千恵

JVCの活動とその目的に御理解を

▶**JVCとは**— Japan International Volunteer Center は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶**JVCの会員募集について**— 会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
 団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶**機関誌『Trial & Error』のみの購読について**

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶**送金の方法**— 下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所
 (住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶**みなさまの募金が支えるJVCの活動**— 救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. **アフリカ難民救援募金** (5月小計 108,337円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. **インドシナ難民救援募金** (5月小計 4,500円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- C. **カンブチア募金** (5月小計 361,000円) カンブチア国内の復興のために使われます。
- D. **クロントイ・スラム募金** (5月小計 601,869円) バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
- E. **デッグ・スラム奨学金・基金** (5月小計 50,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- F. **日本語家庭教師募金** (5月小計 7,709円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- G. **医療募金** (5月小計 5,000円) 緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
- H. **ボランティア募金** (5月小計 0円) 現場で活動を続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
- I. **JVC運営経費募金** (5月小計 0円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. **無指定募金** (5月小計 111,140円)

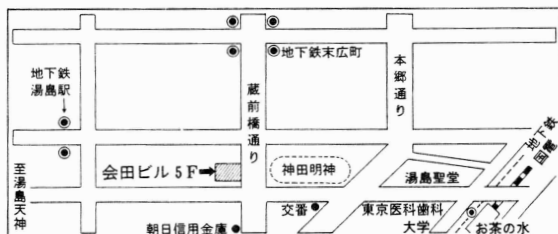
▶**送金の方法**— 下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- 東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)
- 加入者名— JVC 東京事務所

編集後記

▶オフィスの正面に緑濃い神田明神が見える。窓を開けると初夏の風が快い。あと数日もたてば日本列島は厚い雲に被われ、梅雨に入る。

ここ何年か地球の異常気象が報じられ、アフリカの干ばつもそのためといわれた。アメリカ大陸やアフリカ大陸には巨大な滞水層があり、そこから水をくみ上げている。新しい水は入らないので一度干上がると二度と水は房らない。そういわれてはじめて水も貴重な資源であることに気づく。全ての資源を輸入に頼っているこの国では水だけがかかるうじて自前である。天の恵みと思えばうっとおしい梅雨も少しは凌ぎ易いかもしれない。



昭和61年6月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代
 発行人 星野 昌子
 発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
 〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階
 ☎03(834)2388 Telex: 2323187 JVC HQ J
 バンコク事務所 JVC THAILAND
 67 South Sathorn Road
 Bangkok, THAILAND
 ☎(286) 4857
 Telex: 87032 COMSERV TH
 ソマリア事務所 JVC SOMALIA
 c/o UNHCR P.O. Box 2925
 Mogadish, SOMALIA
 Telex: 794 HICOMREF SM
 エチオピア事務所 JVC ETHIOPIA
 P.O. Box 6941
 Addis Ababa, ETHIOPIA
 印刷所 (株)ベスト・プリンティング
 ＊本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共300円